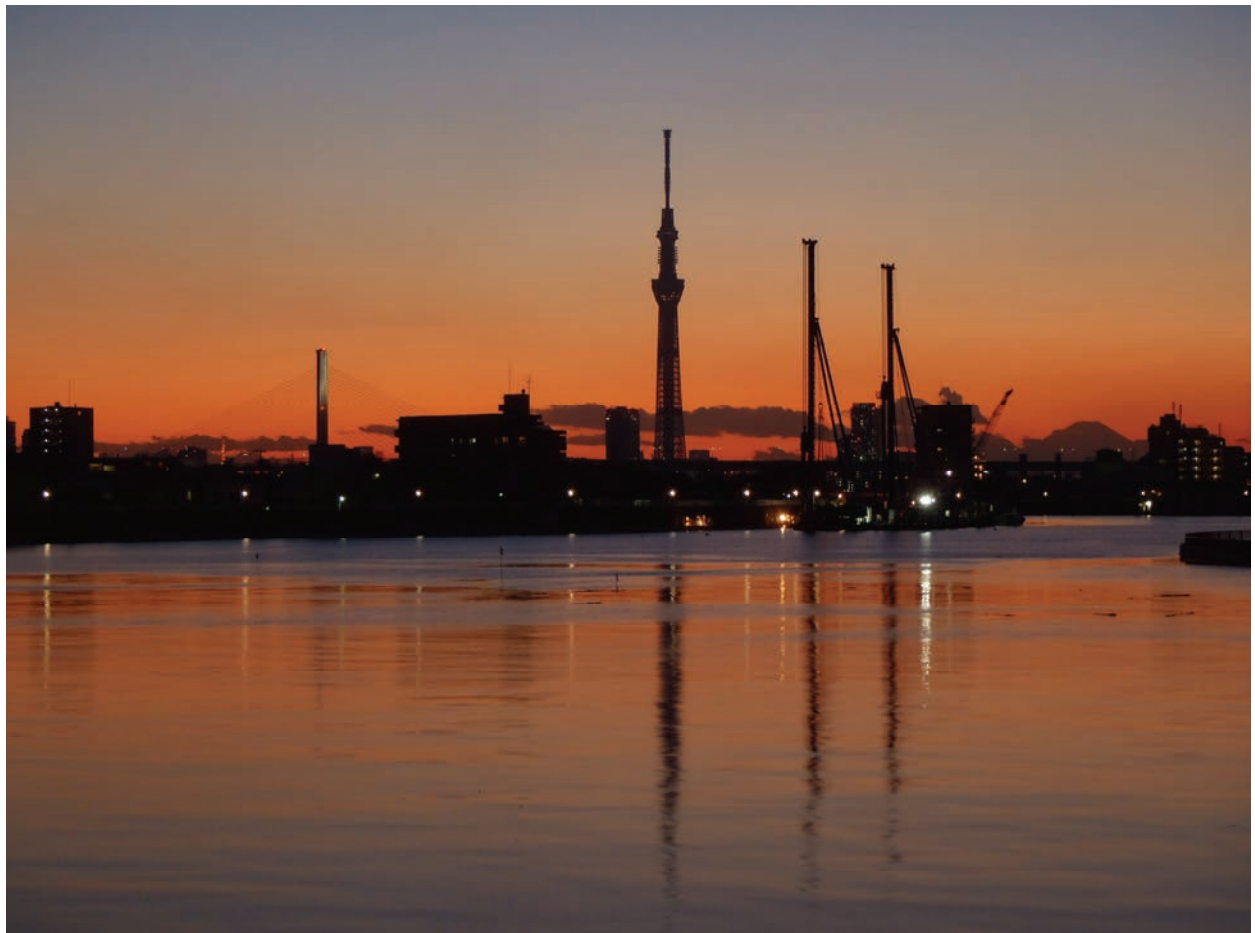


ア！安全・快適街づくりニュース

2015年6月 vol.21 2015年度総集編

人を育み川 中川

朝日映る
空の山
夕日に染まる
スカイツリー
老舗ノミヤ
9はむ街
森羅の家
万葉の昔から
人を育み川
中川
如重 石川金辰



目次

地域のことは、地域で考え、地域で実行する□□□石川金治	1
これまでの10年、これからの10年に向けて□□□加藤孝明	2
輪中会議の今後を考える□□□土肥英生	4
過去の水害の記録をまちにデザインする□□□中村仁	5
「輪中会議」を広めよう□□□成戸寿彦	6

地域から

地域の福祉団体 うらら保育園□□□齊藤真弓	7
自然の理解が身を守る□□□岡田雅樹	8
地域防災力のキーパーソンとは□□□竹本利昭	10
輪中会議をベースキャンプにしながら地域貢献□□□菅野二郎	12
自助力・共助力を高めるために□□□東原洋子	13
西新小岩3丁目町会勉強会の報告□□□渕井恵子	14
東新小岩七丁目町会の減災活動□□□百瀬敏明	16
西新小岩三丁目の白浜さんの写真が語る□□□白浜満	18
現代の狼煙(赤・白の旗)は「平常時も活用できる」□□□中川榮久	19
なぜ・何のために・誰のために□□□青柳勇	20
葛飾区医師会からの問題提起□□□三尾仁	21

インタビューから□□□渡邊喜代美

西新小岩五丁目町会 町山光司会長へインタビュー	23
西新小岩三丁目町会 鈴木一喜会長へインタビュー	24

学生から

防災もまちづくりに新たなツールで活性化□□□吉岡佑	25
地域づくりへのモチベーション□□□色田彩恵	26
輪中会議に参加して□□□眞船聖吾・鈴木正好・細渕勝	28
二上小学校「石川理事長」の特別授業□□□柳沼翔平	29

行政から

大規模水害から首都圏を守るための取り組み□□□里村真吾	30
葛飾区ご担当からのメッセージ□□□土屋俊昭・小野寺守宏・大田聖家・泉山省吾・関口薫	31
低地帯の水害対策□□□中原光敏	33
新小岩ゼロメートル市街地と地域のまちづくりに「防災」も貢献！ 菊川隆憲	34

NPOア！から

平成26年度の活動結果について□□□宇賀俊夫	36
平成26年度葛飾区地域活動団体助成事業について□□□増澤一郎	37
新小岩中学校避難所実践型訓練に参加しました□□□山上忠	39
NPOア！のホームページについて□□□古川修	41
「天サイ！まなぶくん」の全国への広がりを受賞について□□□古川修	42
葛飾区新小岩北地区における2006－2015活動概観□□□塩崎由人・渡邊喜代美	43

「地域のことは、地域で考え、地域で実行する」

特定非営利活動法人「ア！安全・快適街づくり」

理事長 石川金治

私たちの NPO が、活動を始めて 2 回目の「羊」歳を迎えました。ストレイシープ（迷える子羊）のように、迷いながらも時勢に則した活動をしてまいりましたので、その軌跡をたどりましょう。

堤防が崩壊したら、三階以上の建物に避難しなければ命の保証が出来ない「ゼロメートル地域」の現実を地域の人達に伝える必要性を感じたのは 1971（S46）年の新川西水門の事故。即ち、満潮時に僅か 20 分水門が開いてただけで、床上浸水 700 戸の被害事故です。破堤すれば津波のように流れ込む怒涛に、住民が巻き込まれることは火を見るより明らかなです。その対策として私が提案したのが地震に強く「親水」性に優れた幅の広い高台です。

この実現には、膨大な経費と住民の協力が不可欠です。従って、一朝一夕には完成しないが、計画のオーソライズ(公認)は必要なので、「低地対策防災委員会」を立ち上げ議論し、河川整備計画やマスタープランに計上されました。

隅田川ではこの堤防に面したマンションの売れ行きが好評で、幅広にするための用地を無償で提供するルールが出来、全延長の半分は実現のめどが立っています。しかし、戸建て住宅が密集している区域は未完成です。

その実現には、見本を見せるのが近道と考え、葛飾区西新小岩に拠点を構えて活動しています。

「地域のことは、地域で考え、地域で実行する」という地域主権に基づき、次のような活動を予定している。

1. 参加すると楽しくなる活動 モチベーションを高める活動。

NPO の企画を実現することから脱皮して、ご近所の井戸端会議の雰囲気です。企画を立てて、実施する。例えば、天災まなぶくんを使っの防災学習、水位表示板を利用して避難場所の確認等

2. メンバーが増える活動

お友達を誘いやすい楽しいイベント、公園で、船で、この地域の先進地域等で行う活動、

3. 新しいメンバーの発掘、

町内会中心のワークショップから、子供達や父兄、災害弱者とそれを支える人達、企業、大学、医療など幅広い多様な関係者が参加できる「輪中会議」への発展的変革

これまでの 10 年，これからの 10 年に向けて ー広域ゼロメートル市街地のまちづくりー

加藤孝明

NPO ア！安全・快適街づくり理事
東京大学生産技術研究所准教授)

今年度で最初のワークショップに参加してから早いもので 10 年目を迎えます。「10 年も」経ったとも言えますし、「10 年しか」経っていないともとらえられそうです。

10 年前，NPO ア！の石川理事長に誘われてこの地域で活動を始めました。その頃と比べると，私自身も随分と成長したなとしみじみと思います。私だけではなく，一緒に取り組んだ学生も新小岩北で学び，成長して社会に旅立っています。塩崎さんは学部 4 年生の頃から参加し，その後一貫して主体的に活動し，今や中心的な役割を担う欠かせない存在になっています。また地域活動の雰囲気も変わりました。今では総務省防災まちづくり大賞総務大臣賞（2013 年度）をいただくまでになりました。また，輪中会議の開催を通して地域の中に大規模水害への備えを考える「輪」が作られつつあります。

一般に地域社会での防災の取り組みでは「防災疲れ」が良く見られます。いつとき盛り上がりますが，しばらくすると，活動の担い手が固定化し，内容もマンネリ化し，活動が停滞し，そして自然消滅に近い形になるというものです。この 10 年間，この地域では，そういう側面が全くないわけではありませんが，活動は持続し，発展しています。この意味においては「10 年も」発展しながら続いていると言えます。

一方，こうした取り組みは長期的に持続させていく必要があります。大規模災害はいつ起こるか分かりません。30 年，40 年起こらないかもしれません。また大規模水害に対応できる安心して暮らせる街にするためには，30 年，40 年かかるかもしれません。そんなに長くなるのかと感じられるかもしれませんが，地震火災に対する防災都市づくりも昭和 40 年代の初め頃に始まり，現在やっと形になりつつあるという状況です。同じように今の取り組みも数十年，形を変えながら続いていくべきものととらえています。この意味では，やっと 10 年，まだ「10 年しか」経っていないとも捉えられます。

この間，活動の中で重要なキーワードがでています。自分たちで主体的に取り組むという「内発性」，そして活動しながら発展していく，雪だるまが転がりながら大きくなっていく

という「自律発展性」です。この2つのキーワードは新小岩北地区の活動に定着したのではないのでしょうか。これが次の時代の地域の文化につながることを期待しています。長続きさせるという義務感、使命感ではなく、自然に長続きするような状況を創るという意識が大切だと思っています。

3年前から始まった「輪中会議」は、今後の活動の発展につながる画期的な仕掛けだと思っています。輪中会議には、学校、保育園、民生委員など地域の中のいろいろな立場の人が参加しています。新しいキーワードは「多様性」です。この「多様性」がこれからの活動のエンジンになり得るのではないかと感じています。これは輪中会議がその参加者を一つの方向性に引っ張っていくということではなく、参加者がそれぞれの立場でそれぞれの関心に基づいてそれぞれの方法で取り組み、それが全体として大きな流れになっていくことが望ましいと考えています。そのためには「共有」が欠かせないと考えています。各々の問題意識、経験、工夫、そして今後の大きな方向感を全体で共有することが重要だと考えています。輪中会議は、地域の「共有」の場であり、プラットフォームとして機能することを期待しています。これが次のステージへの展開につながることを期待しています。

最後に最近学んだことを紹介します。昨年、一昨年と「いたばし『まちの学校』」に参加しました。地域での助け合いを共通テーマに防災と高齢者福祉が取り上げられました。防災と高齢者福祉も問題の構造は同じです。ニーズに対して既存の行政資源では対応しきれなくなり、地域社会へ依存せざるを得なくなっている、かつ、地域社会が精一杯取り組んだとしても、それでもなお足りないという構造です。つまり行政、地域住民、地域医療、地域福祉などの専門家を含む社会全体が工夫しながらより良い方法を考えなければならないという状況です。役所の縦割りでは別部課ですが、地域社会が主体的に考えていく場合は、防災だけ、高齢者医療・地域福祉だけを考えることに意味がありません。別々に考えるよりも、一緒に考えていくことがより効果的な解決策、より効率的な活動につながっていくと思います。今後に向けた新たなキーワードとして「総合性」を挙げたいと思います。防災を主軸にしつつも、総合的に考えていく、総合性は的確なバランス感覚をもって考えていくことがこれからの活動の重要な視点だと思います。

この10年前に始まった活動は、この先、長期間にわたる取り組みの一部だと捉えています。歴史の一部を歩んでいる実感を持って今の時代に行うべき活動を考えていきたいと思っています。

～輪中会議の今後を考える～

土肥英生
認定特定非営利活動法人 日本都市計画家協会事務局長
NPO ア！安全・快適街づくり理事

3月28日に行われた第8回輪中会議は、様々な立場からの意見交換を行うことができて、輪中会議の今後の展開に向けたヒントが多く得ることのできた会議ではなかったと思います。そこで、第8回輪中会議を受け、輪中会議の今後を考えてみました。

1. 地域の専門家との新しい協力関係づくり

第8回の輪中会議でははじめて、保健所、医師会の方々が参加し、地域内に新たな病院ができることをきっかけとして、例えば、『被災者の担架救護訓練』のような実践的な訓練を、消防、医師会も協力して実施することが提案されました。

今後、急速に増える後期高齢者の問題を視野に入れると、『生身の人をどうタンカに載せるのか』は、体が不自由になった高齢者の介護の作法を学ぶことも通じる大切な訓練となります。輪中会議の下に、防災まちづくり部会を立ち上げ、町内会に加えて、消防、医師会、福祉の専門家を連携した訓練や学習会を実施することで、輪中会議が、地域における多様な専門家との新しい協力関係づくりを形にしていく場としてはどうでしょうか。

2. 防災こそ「ワクワク」するまちづくり

町内会などの防災担当者の中には、災害はいつ、どこで発生するか分からないため、何度も同じ防災訓練を繰り返し、そうした徒労感を感じることも仕方のないことだと防災訓練を、賽の河原の石積みのように感じている方も多いのではないのでしょうか。

一方、東新小岩7丁目市民消火隊「俺たちの朝旅」は、ボート操船技術向上への取り組みが新しいまちの発見につながっていくチャレンジとなっています。こうした取り組みを新小岩地域全体に広げて、例えば、中川において、防災力向上に向けたボート訓練競技を行うといったように、防災こそ、「ワクワク」するまちづくりを広げていくはどうでしょうか。

3. 輪中会議のミッション（目標）の設定

8回の輪中会議で地域において活動を行っている人材の顔が見えてきている中、輪中会議を横のネットワークづくりからステップアップするため、活動の実行目標を設定し、新たな活動を生み出す場として発展させてはどうでしょうか。

①減災まちづくりに関する体験や知恵の共有

これまで継続していった円卓会議の成果を、ネット等を通じて発信することで、新小岩北地域から減災まちづくりに関する体験や知恵を発信。

②新小岩北地域全体で防災意識を共有・活性化するシンボリックなイベントを実施

活動のすそ野を広げるために、中川において防災力向上に向けたボート訓練競技など、地域全体が参加し、交流できるシンボリックなイベントを実施。

③住み続けるためのまちづくりプログラムの展開

輪中会議のメンバーが、様々な関係者（消防、福祉、医療、防災）とともに、輪中会議をプラットフォームとして活用し、防災・福祉・医療・教育の視点を組み合わせた住み続けるためのまちづくりプログラムづくりを実施。

過去の水害の記録をまちにデザインする ～ドレスデンを訪れて～

中村 仁

芝浦工業大学教授 環境システム学科

NPO ア！安全・快適街づくり理事

2014 年秋に、ドイツのドレスデンを視察する機会があった。ドレスデンは、ドイツ東部のエルベ川沿いの美しい都市である。第二次世界大戦の空襲でまちの大半が破壊されたが、戦後数十年かけて宮殿や教会などの歴史的建造物を元のとおり再建している。旧市街地区は、バロック様式の壮麗な建物と塔が建ち並び、歩いていると絵のように美しいシーン次から次へと展開していく。

しかし、ドレスデンも水害とは無縁ではない。2002 年にエルベ川が氾濫して大きな被害を受けており、さらに、気候変動の影響で今後も大規模水害のリスクが懸念されている。

写真は、エルベ川に架かるアウグストゥス橋である。観光客であれば誰もが渡るであろう人通りの多い橋であるが、その橋の中間地点に「波」のようなかたちをしたオブジェがある。近づいて見ると、下のほうに「2002 年エルベ川洪水はどこでも起こりうる」という趣旨の文言が書いてある。つまり、エルベ川洪水の記憶をとどめ、これからの洪水に備える必要がある、という意識啓発のための看板である。

なによりも印象的なのは、看板のデザインである。ドレスデンのまちのイメージを損なわずに、訪れる人々にさりげなく水害リスクを伝えている。控えめではあるが、伝わるメッセージは非常に大きい。これはまぎれもなくアートであり、そのデザイン性の高さに深く感銘した。

日本でも、NPO ア！安全・快適街づくりが先駆けて実施した水位表示板の設置、電柱での水位表示などの取組みが、今では全国的に普及してきている。しかし、これからは、たんに目立つためだけでなく、街並みへの配慮や地域の魅力を高めるようなデザイン的な工夫についての取組みも展開していく必要があるのではないだろうか。ドレスデンのまちを歩きながら、そんなことを感じたしだいである。



「輪中会議」を広めよう

成戸寿彦

NPOア！安全・快適街づくり 理事

1、開かれた「輪中会議」

「輪中会議」は、新小岩北地区を安全で快適な地域としていくために、地域の方々・行政・専門家・NPOがそれぞれ対等な立場で集い、各々の経験を共有しつつ学びあっていく場です。特徴的なことは参加の幅が広いことで、例えば地域の方々としては住民以外には各町会の代表者・保育園や老人福祉施設などの社会福祉法人・民生委員・消防団・消防署・小中学校・企業・病院などが、行政としては荒川下流工事事務所や葛飾区が、専門家としては東京大学や芝浦工業大学が、そしてそれらのつなぎ役として我々NPOが参加しています。

現在は荒川が上流で決壊した場合など大水災害に対する避難を中心に各々の立場で情報を共有し連携の方策を模索していますが、いずれは(地域が混乱しないように)大震災に対する避難との違いも議題とすべきであろうと考えています。

いずれにしても地域の安全をこれほど幅広い方々が検討している組織が東京にあるだろうか考えた時に、この地域がこうした活動により総務大臣の表彰を受けたことから、実に稀有なことであるということがわかるのです。

2、都市づくりのグランドデザイン

一方東京都では、昨年の暮れに公表された「長期ビジョン」によりますと、舛添知事流のまちづくりの展望を示すために「都市づくりのグランドデザイン」を策定することとしています。

私も 1999 年に石原知事の都市づくりの展望を示すために「都市づくりビジョン」を策定していますので、その時を振り返りつつ地域的な今回の展望を大まかにしてみますと、センターコアと言われる東京中心部の整備の在り方や人口が減少する多摩地域の活力向上に加えて、センターコア以外の区部周辺部の整備方針を示すことが求められるだろうと考えています。

3、一つの広め方(提案)

区部の周辺部は地域により特性が異なるのは勿論ですが、こうした地域の安全・安心という側面を考えた時に、前述した「輪中会議」という葛飾区での取り組みはほかの地域でも大いに参考になるのではないのでしょうか。安全や安心は行政により与えられるものではなく、地域自らも考える必要があるからです。

東京都が策定している「都市づくりのグランドデザイン」もいずれ各区の意見を求める段階に至ると思いますが、その際、葛飾区からもぜひこうした動きを紹介していただきたいと、切に望むものであります。

地域の福祉団体 ～うらら保育園～

社会福祉法人清遊の家 うらら保育園
園長 齊藤 真弓

3. 11の大震災以降「安心と安全の保育～大規模震災の発生時に備える～」を目標を掲げ、これまで備えていた消防計画、避難訓練マニュアル、室内環境の安全性、備蓄品・備蓄品保管場所など、様々な角度から再構築をすすめてまいりました。

平成25年秋には、BCP（事業継続計画）の作成が完了し、それをもとに職員研修を重ねています。

【うらら保育園 事業継続計画】

■災害時行動指針

- ①守る：子供・保護者・職員の生命を守る
 - ②逃げる：安全な場所へ、安全な方法で逃げる
 - ③判断する：職員ひとりひとりが臨機応変な理念（＊）に基づき判断する
- ＊各施設の利用者の安全確保と人命の保護をすることとする

多くの小さな命をお預かりする施設として、避難誘導手順の前に、目の前の乳幼児に対して瞬時の安全確保、瞬時の判断能力の向上を職員ひとりひとりに日々問いかけています。

食えること、歩くこと…が未成熟な乳幼児に対して細々とした安全配慮の視点を日常から備え、非日常となった瞬間にその「備え」が行動として発揮される保育環境づくりを心掛けています。

とりわけ26年度は、備蓄食について「アレルギー一食」の対応ができるよう見直しを行い、また、毎月1回の「避難訓練」の終了後に、園児の姿や職員の気づきをその日のうちに共有するミーティング開催を新たな取り組みとして実施いたしました。



毎月の避難訓練。訓練終了後、防火管理者から防災に関するお話を聴いています。

自然の理解が身を守る

岡田雅樹

二上小学校 P T A 会長（前）

国立極地研究所 准教授

南極観測隊の防災対策から何を学ぶか

南極観測隊は毎年 80 名前後の隊員が全国から選抜され、国内での訓練を受けて南極に派遣されます。南極で安全な活動を行うためには、事前に自然環境や行動の詳細を十分に理解し、訓練を行うことが、隊員自身の安全を確保し、迅速に現地活動を行うために重要な準備作業になります。日本で生活してきた新人隊員にとって、南極という自然環境がどのようなものであるか、正しく理解することは容易ではありませんが、事前教育が最も効果的な方法であることは間違いありません。

防災において事前教育は、日本で生活をする上でも重要なことだと考えられます。東京のような安全な街で生活していると防災意識は時に不要と思われるほど、快適かつ安全な住環境が整えられているように思います。しかし、一旦大規模災害が発生すれば大都市であるために、普段予想が難しい事態に発展する可能性も秘めていると考えられます。特に、観測隊という新人隊員に相当する小中学生には、正しく地域の自然環境や特徴を教えることは、いつか訪れる災害への対応を頭の隅において、住民間の連携を図るうえで非常に重要な最初のステップであると考えられます。

南極観測隊では、低温対策、ブリザード対応、防火対策、救急救命訓練、野外行動訓練、危険予知訓練など幅広く安全対策の打ち合わせと訓練を行っています。講演でこれらすべてについて、話すことはできませんが、南極という自然環境がどのようなものか、そして厳しい自然環境で活動するために、どのように対応しているかを知ってもらうことで、葛飾の町で“もしも”の事態に備えておくことの大切さを考えてもらうための、端緒になればと考えています。

南極観測隊の越冬隊はおよそ 30 名で、1 年間昭和基地の運営と観測の業務をこなしています。少ない人数で業務と危機管理を行うことは容易ではありませんが、人数が少ないために問題意識を共有することは比較的簡単であるともいえます。新小岩地域のように多くの人が集まり、問題意識の十分な共有が困難な状況では、より長い目でみた安全管理意識の共有と多くの方に理解をしていただくためには、息の長い活動は重要であると考えられます。

南極観測隊の活動を通じて、子どもたちに自然環境の理解を深めてもらい、我々が住む葛飾の自然環境の理解と災害への対応を考える入口になればと思います。



写真

左上：南極に小学生の寄書きを持って行った岡田PTA会長（国立極地研究所 准教授）

左中：氷壁を背に立つ岡田さん

左下：NPOのパネルを見る子供たち

右上：南極の雪上車

右中：南極観測隊員（撮影 岡田氏）

右下：二上小学校のプールでの救援艇乗船体験

地域防災力のキーパーソンとは

東新小岩7丁目町会防火防災部長

市民消火隊隊長 竹本利昭

東日本大震災を契機として、現在まで、日本各地で地震、噴火が頻発している。観光の名所、箱根でも2015年5月11日現在、火山性地震が連続して続き、一部立ち入り規制となっている。我々の住まうこの国が地震の活発期に入っているという証左とも言えよう。

東京でも首都直下地震の発生確率が30年以内に70%に達するなどと言われ、東京低地に生活する我々の不安も高まっている。メガクエイクに伴う水害などが起きれば、新小岩北地区は壊滅的被害となることは容易に想像できる。

そんな、絶望的な地域ではあるが、町会活動を通じ定期的に輪中会議に出席し勉強を重ねる事で、激甚災害に対し、少しでも被害を少なくし、どう向き合い、立ち向かって行けば良いかの方向性は、固まってきたのではないかと思う。

ただ、ただである。

この知識と知恵の共有がまだまだ限られた人達だけのものであるという事が現前の事実として有り、広く一般住民に広めて行かなければこの実効は得られないのである。

我々、町会の防火防災部、市民消火隊も日々研鑽し知識、技術の習得に励んではいるのだが、隊員構成が現在社会の中核として活躍している30代40代が多い。災害が土日祭日に発生すれば、対応も出来ようが、平日昼間などに発生した場合には無理に帰宅せず、現地でご活躍を。と、言うほかはない。

そこで提案したいのが、比較的地域滞在率の高い女性による防災力の向上である。私が考えるに地域の基盤を支えている人々の中でも重要な位置を占めるのは、女性、特に「お母さん」と言われる世代ではないかと思う。この地域で生活をし、子育てをし、友人、知人のネットワークを構築している「お母さん」。

ここで実際に知り合いの方のお話をさせて頂くが、私が子供の小学校で PTA 活動を通じて 8 年前に知り合った女性で、現在も得難い仲間として尊敬している方がいる。この女性は三人のお子さんの育児と並行しながら PTA 副会長を 4 年間も続け、ご主人の仕事も支えながら、ご自身のスキルアップにと様々な事柄にチャレンジし続けているのだ。頭の回転が速くアイデアマン（ウーマン？）、行動力もあり、優れたリーダーシップまで兼ね備えているため、友人、知人が自然に集まってくるという、大変に魅力ある人物なのである。私も我が身を振り返り、怠惰になりがちな日々の中、そのバイタリティに大いに刺激を受けている一人である。

こういった人材が、今よりももっと防災活動に加わってくれば、地域防災力は格段にあがるのではないであろうか？そして、こういった人材「お母さん」という方々はこの地域には、言葉は悪いが「ごろごろいる」のである。

ただ、残念ながらこの世代は大変忙しい日々を送られている。防災という実利が見えない活動に興味と時間を割く余裕はないのであろう。事あるごとに声をおかけするのだが、協力を得ることは非常に困難である。ただ、確実に言える事は地域に埋伏しているパワーはまだまだ強大だという事。そしてこのパワーを防災力として有効に活用出来た時、また次の展開が期待できると確信している。

その方策を輪中会議を通じ探していけたら面白いのではないかと考える。

キーパーソンは「お母さん」。

—輪中会議をベースキャンプとしながら地域貢献—

荳野 二郎

東新小岩七丁目在住（市民消防隊）

私は平成25年度までは地元の小学校PTA会長の立場で輪中会議に参加しておりましたが、平成26年度はPTA会長を退任いたしましたので、地元町会の市民消防隊の一員として、引き続き輪中会議に出席させていただいておりました。

これまで、輪中会議を通じて私が学んできた一つ目のことは、「いざという時に役に立つのは経験である」ということです。そこで、私自身常に防災という意識を薄れさせずに維持するため、そして、少しでも経験を積むために地元町会の市民消防隊に入隊し、区内の市民消防隊による「操法大会」にも出場しました。これは、いざという時に防火水槽からC級ポンプを使用して消火を行うための手順の正確さとスピードを競う大会です。私としてはもちろん初めての経験でしたが、私の所属する隊としても15年振りの出場であったため、地元の本田消防団（第六分団）の皆様にご指導いただきながら、必死にポンプの操作方法を習得しました。残念ながら入賞することはできませんでしたが、これも大事な経験です。地元にそのようなポンプがあっても、使い方を知らなければ、いざという時に火も消せません。今後も定期的に大会に出場し、その技能を高めていきたいと思います。

また、輪中会議で学んだこととして、もう一つ。「ここで学んだことを所属するコミュニティに還元する」ことの大切さです。それが、地域防災力を向上させるために必要な要素の一つであるということ学びました。子供たちに比較的近い立場にある私の役目として置き換えた場合は、子供たちにどう還元するか、ということかと思えます。子供たちは大人以上にシビアであり、楽しくなければ、「経験」してくれません。大人たちがどんなに大事な訓練だからと言っても、子供たちは、楽しくなくては参加してはくれないのです。また、子供たちが楽しんで経験してくれれば、その情報は確実にお友達に伝わりますし、家族に話しをしてくれれば、今度は大人たちを引き込む入口にもなります。如何に楽しみながら大事なことを経験してもらうか、そしてその楽しかった経験をお友達に、家族に話しをしてもらえるか、それが地域防災力の向上に直結することであろうと思います。

今後もこの輪中会議をベースキャンプとしながら、地元住民の一員として、積極的に活動して、地域防災力の向上に微力ながらも貢献して参りたいと思います。

自助力・共助力を高めるために

東原洋子

上小松町会会長

命を守る体制を整えました！と葛飾区広報 {かつしか} に大きくのっていました。葛飾区では、災害に強い地域づくりを呼びかけています。それには、自助・共助力を高めることが第一で、それは地域の役割です。

自分たちの地域を十分知った上で、地域の対応を考えなくてはなりません。その一つには、いざ災害時に一人暮らしの高齢者、災害弱者、情報がない・・・、得ることが困難との声は前々から言われていました。昔と違い“隣組”でもちゃんと把握できていません。ここ数年行政でも、自助、共助がしやすいような対策が進められているようです。

私たちの町会では、慣例の防災訓練を見直してみようと、訓練のメニューを検討しました。東日本大震災で中学生の活躍を見直され、話題になりました。この町会には、町会の避難所になっている上平井中学校があると、学校へ生徒の参加を相談しました。生徒は試験前で大勢の参加は約束できないとのこと。試験前にも関わらず当日は30名の参加、お手伝いをいただきました。打ち合わせのときは、副校長先生が参加していただき、生徒たちは、ただ参加するだけでなくお手伝いさせてください、その方が、生徒たちは喜ぶますとのこと、町会側も願ったり、かなったりです。即、訓練ヶ所に配置して役員と一緒に活動することとしました。上平井中の卒業生の中村さんにも度々相談に乗ってもらい、生徒のまとめは任せてくださいと、力強いサポートがあり、思いもよらず大勢の参加をいただいたのは中村さんの生徒へのかかわりがあったからと感謝します。

東京都から配布された、スタンドパイプを使用して訓練を行うことを条件でいただいたので、前もって使い方の講習を受けて、スタンドパイプも訓練に加えることにしました。初期消火訓練・起震車・AEDの伝え方・震災器具材の見学、炊き出しのコーナーと訓練内容は多いようですが、少しでも皆さんが楽しく参加できるよう各訓練コーナーをラリー形式でまわり、訓練を受けたらスタンプを押して、次へ移動と、全コーナーを受けてもらうことにしました。この方が、班別に訓練していたときよりも、時間が短縮されました。

「災害は突然やってくる、そのときあわてないために・・・」のうたい文句の下、毎年訓練を行っていますが、自助力・共助力を高めるにはまだまだ町会の方々に呼びかけていかななくてはならないと考えています。

次回からは、生徒も巻き込んで、最初から打ちあわせにも参加してもらい、町会の皆さんとコミュニケーションを深めていけたら、それが共助力に繋がるのではないかと考えています。

西新小岩 3 丁目町会勉強会の報告

渚井恵子
西新小岩 3 丁目町会総務部長

西新小岩 3 丁目町会と NPO 法人「ア！安全・快適街づくり」は、これまで十二年以上にわたり、東部低地帯の地震時水害を軽減するために、行政機関のほか大学や他町会などと協働して活動を行ってきました。その結果、浸水に備えた水位標の設置、ゴムボートの普及活動、新小岩公園高台化の区都市計画マスタープランへの位置づけなど、一定の成果を挙げてきました。

しかしながら、実現化を目指したスーパー堤防は、区画整理を伴う大規模な事業であり、相当な年月を要することが判明したため、当面、明日来るかも知れない大地震時におけるもしもの水害に備えるため、緊急避難場所としての高台の整備を目指すことにしました。

そこで、西新小岩 3 丁目町会の有志住民は、NPO 法人「ア！安全・快適街づくり」の協力のもと、高台整備の実現に向け、平成 25 年 8 月に東京都都市づくり公社から「水害時避難用高台整備の勉強会」としてまちづくり支援事業の認定を受け、高台整備の勉強会と活動を行っています。

勉強会は、基本的に毎月 1 回第一土曜日に行い、25 年 10 月より 27 年 4 月まで計 15 回実施しています。それぞれの勉強会の概要は次のとおりです。

- 第 1 回勉強会（H25. 10. 5）
これまでのスーパー堤防事業化活動の総括と今後の勉強会のテーマについて
- 第 2 回勉強会（H25. 11. 2）
葛飾区の地震火災時及び水害時の避難場所の現状と課題について
- 第 3 回勉強会（H25. 12. 7）
葛飾区職員による葛飾区の過去の大洪水と水防計画について講義
- 第 4 回勉強会（H26. 1. 11）
荒川下流河川事務所長による東日本大震災の教訓とより安全な避難方法やスーパー堤防整備計画の現状について（河川防災ステーションの紹介）
- 第 5 回勉強会（H26. 3. 1）
葛飾区の西新小岩避難場所計画の問題点と小・中学校を避難場所とする要望の検討
- 第 6 回勉強会（H26. 4. 5）
東新小岩 7 丁目町会長による同町会の先進的な共助体制と防災活動について講義
- 第 7 回勉強会（H26. 5. 17）
勉強会が土木学会市民普請支援事業に採択されたことの報告とその助成金を活用した紅白旗配布による共助体制造りの提案、河川防災ステーションのスキームの説明
- 第 8 回勉強会（H26. 6. 7）
土木学会市民普請支援事業の助成を活用した赤旗白旗の作成と配布方法について提案、河川防災ステーション整備に伴うコミュニティ施設や避難施設の要望について
- 第 9 回勉強会（H26. 10. 4）
地域の共助体制を強化する赤旗白旗事業の進め方と地震時水害時の避難方法及び河川防災ステーションについて
- 第 10 回勉強会（H26. 11. 8）
「第 7 回輪中会議(H26.10.19)」の報告と「東部低地帯の地盤と中川左岸堤防について」の講義
- 第 11 回勉強会（H26. 12. 6）
「浦安液状化被害状況」と「西新小岩 1, 2 丁目の中川沿川都有地に予定されている

緩傾斜型堤防整備事業の西新小岩3丁目住民生活への影響について」の講義と「東京都都市づくり公社への勉強会中間報告の提出について」の説明

○第12回勉強会（H27. 1. 17）

「河川防災ステーションの制度と避難広場計画の課題について」の説明と「勉強会中間報告の葛飾区都市施設担当部長への説明」の報告

○第13回勉強会（H27. 2. 7）

「西井堀を埋め立て緑道整備を区が実施した経緯」の説明と「河川防災ステーション避難広場に望まれる施設、災害時避難の新たな考え方、西新小岩避難場所や避難路等の可能性、新小岩地域浸水被害軽減策を考える」をテーマにした講義

○第14回勉強会（H27. 3. 7）

「西新小岩地区の地盤高や地形等を踏まえた避難経路」についての講義と「河川防災ステーションと緩傾斜型堤防の整備を前提に、水害に強いまちづくりの施策を議論し「第8回輪中会議（H27.3.28）への勉強会提言」を作成

○第15回勉強会（H27. 4. 11）

「第8回輪中会議に参加して勉強会の成果報告を行った感想、葛飾区と東京大学加藤研究室の共同調査研究「浸水対応型市街地について」の発表

こうした勉強会の活動を通し、町会の防災体制や区の水防計画の課題が明確になり、町会の防災体制の拡充や区の水防計画の見直しの提案を行うほか、河川防災ステーションに整備される施設に対する提案を検討するなど、できるものから一つひとつ着実に実現を図ることにしています。

課題としては、新小岩公園の河川防災ステーション整備への地元提案をまとめるには、西新小岩3丁目町会だけでなく、新小岩公園近隣の他町会を含む広域的な連携が必要となることです。また、河川防災ステーションの整備に伴う避難経路の検討や新小岩駅北口付近のまちづくりとの連携が必要となります。

今後は、輪中会議等を活用しながら、近隣の町会や葛飾区さらには荒川下流河川事務所や東京都とよりいっそうの連携を図っていきます。



～東新小岩七丁目町会の減災活動～

東新小岩七丁目町会副会長 百瀬敏明

当町会の使命は、「安全・安心で住みやすい街づくり」の構築に向けての取り組みであり、その中でも「災害に強い街づくり」を目指して活動しています。

なぜ、「災害に強い街づくり」が必要なのでしょう。それは、

1. 我々の住む地域は、ゼロメートル地帯であり地震による家屋の倒壊、火災だけでなく、河川の決壊による水害対応

2. 町内に高齢者が増加しており、災害時、要援護者支援が必要

など、災害を最小限に抑えるための「減災組織、活動」が確立された街づくりを構築する必要があるからです。

効率の良い安否確認

当町会には、減災スローガンに「隣家三尺」を掲げています。

常日頃、隣近所とのコミュニケーションを持つことが快適な生活を送るために大切と考えます。

お節介をするのではなく、隣近所を気遣うことで生活上のトラブルや高齢者の孤独死の防止、災害時には隣近所の安否確認に役立ちます。

当町会では、「救援・救助旗（現代の狼煙）」をコミュニケーションツールとして、効率の良い安否確認に利用しています。

これは18×15センチメートル角の紅白の旗で、家族の安全が確認できたら「白旗」を、援助が必要な場合には「赤旗」を玄関先など目につくところに出すものです。

この旗は、災害時でなくても、援護を必要とする時にも利用できます。

救助支援者の確保

当町会では、震度5強の地震発生時や大規模台風など災害に対して、災害支援組織を構築しています。

町会役員だけではなく、次の支援力を確保するための活動も行っています。

1. 市民消防隊の組織力強化

市民消防隊は、災害時に重要な役割を担っています。

当町会では日頃の訓練として、C級軽可搬消火ポンプやスタンドパイプを利用した消火訓練や水害時訓練として「ゴムボート操作訓練」を実施しています。

特に水害時訓練では、町内にある二上小学校PTA主催の「子ども祭り」に協賛させていただき、プールを利用して子供たちや保護者も参加したゴムボートによる救助訓練を実施しています。

結果として、市民消防隊の趣旨を理解した「PTAおやじの会」のお父さん方が

入隊され市民消火隊の層が拡大しています。

2. 地元の支援力の強化

災害は、いつ起こるかわかりません。

日中では市民消火隊が集まれないことがあります。

そこで、地元に通学している「中学生」との協働の必要性を感じています。

また、地元の重機を保有している建設会社などと「災害時支援協定」を結び、減災活動への協力体制も確立しています。

輪中会議に参加すると共に、他の防災組織との交流

単一町会の減災活動には限界があります。

そこで、東京都から認定を受けた「東京防災隣組」を通じて交流のある、他の防災組織の訓練に参加して情報や知識収集に努めています。

1. 3.11における障害者の実態報告講演会に参加

障害者が受けた避難所の状況報告を聴き、健常者対象になりがちな避難所運営を障害者、高齢者、幼児など弱者の立場に立った運営方法にするための検討を行いました。

2. 要援護者支援講習会への参加

福祉施設の協力を得て、要援護者が災害時どのような不安を持っているかを把握するとともに、福祉施設とのかかわりについて検討を行いました。

今後の課題

これからは今まで検討してきた減災対策を、具体的な活動として次の点を明確にしていけますので、皆様のご協力をよろしくお願いいたします。

1. 要救護者の救助活動方法

1) 誰が、どのような情報を得て救助に向かうのか。

2) 救助機材は何があるのか

2. 縦の連携は確立できたので横のつながり、面としてのつながりの強化

1) 地元中学生との連携

- ・防災訓練への参画
- ・減災教育への参加要請
- ・町会行事への参画（盆踊り、こども祭りなど）

2) 民生委員、保育園、福祉施設などとの積極的な連携による減災活動

3) 近隣市民消火隊との合同防災訓練の実施

3. 避難所の具体的運営方法の把握

西新小岩三丁目の白浜さんの写真が語る

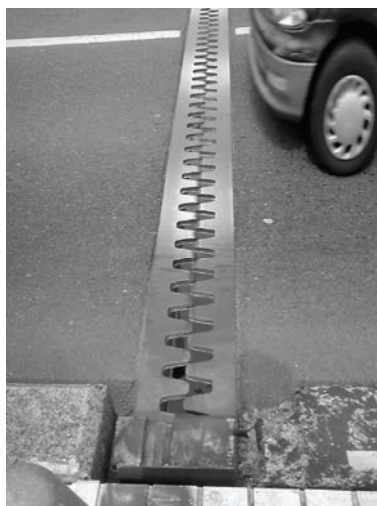
撮影者：白浜満



2011.3.11 震災時、水門が降りた



土手が割れた



橋の接合部が離れた



木根川橋前の中土手への避難橋



親水＊堀切菖蒲園の荒川



土手マラソン

現代の狼煙（赤・白の旗）は「平常時も活躍できる」

中川 榮久

東新小岩 7 丁目町会長

当東新小岩 7 丁目町会で考案・普及中の現代の狼煙は、葛飾区以外でも、関心が高く、葛飾警察や板橋区、足立区などで、普及を検討しています。多くの人々に理解採用された暁には、発災時には多くの人命が救われると、確信しています。

さて、現代の狼煙は、災害時以外にも、活躍の場が多くあります。
例えば、一人住まいの方（高齢者）が毎日無事なときには白旗を玄関ドアに吊るす。体調が悪く他人の助けがほしい人は、赤旗を標示する。

現代の狼煙を見た近隣の人たちが協力して助け合うこととする。
また、赤・白旗不標示の場合には近隣住人が、安否を確認すれば、早急に救急の手配が可能になる。（被災地の仮設住居には、設置したい）

また孤独死の場合も数日間放置問題も解決できます。
その他留守にする時などには、別色の旗（例みどり色旗）を標示する。
（近隣で空き巣対策が必要）

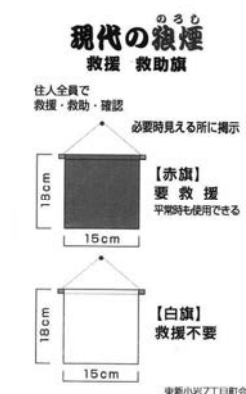
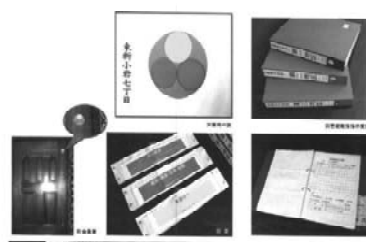
このように、自分の意思を標示する習慣が身につけば、近隣住人とのコミュニケーションがとれ、災害時には大いに役立つと思う。
現代の狼煙が普及して、赤十字旗のように、国際的に救助旗と認知されれば、登山・海難などにも、対応できる。

自分の家族が近隣住人により、助け合える安心感が、外出中にすぐ帰宅することなく、帰宅困難者 0 にすることも、可能と思う。

町会自主企画のワークショップ(2009.4.19)



町会作成:避難グッズ + 赤い旗、白い旗



なぜ・何のために・誰のために

青柳 勇

東新小岩五丁目町会 会長

町会長を引き受けて4年目となるが、NPOア！との係りは、10年くらいになると思う。

最初の印象は、NPOア！の活動（スーパー堤防）のためになぜ、自分たちが協力しなければならないのか？、が分からなかった。

「なぜ・何のために・誰のために」と疑問を持っていた時期があった。

それだけでなく、自分の仕事と、町会の行事に時間を取られ、忙しい中、NPOにまで時間を取られることに大分抵抗があったのは事実でした。

町会長になって、東新小岩7丁目の中川会長さんと会話をするようになってから、時間お使い方、そして地域に対する熱い思い、それに奉仕の心等、学ぶことが出来たと思う。

また、NPOの会議や、輪中会議等、色々と勉強し、情報が増えるにつれて、専門家集団の知識の広さや、人脈の豊富さ、さすが専門家である。

この地域がゼロメートルという場所に住んでいるのであるから、水害のこと、災害のこと等を思うと、もっとNPO、専門家の先生方の知恵とご指導を頂、マイナスの部分プラスに変えて、住みよい、安心・安全な街になるよう、これからの協力していきたいと思う。



輪中会議のとき



総務大臣賞のとき（20140205）

葛飾区医師会・三尾仁医師からの問題提起

第8回輪中会議は葛飾区医師会、保健所、消防署の発言や、やり取りから、災害対策も「総合化」が希求されていることが、改めて強く認識できた。医師会と保健所、消防署、区が連携して災害医療対策を検討していることも分かった。

ここでは、三尾医師(葛飾区医師会 危機管理担当 副会長)に、葛飾区医師会の災害医療に対する取り組み、新病院の備え方、災害時の地域住民の役割について、改めて書いていただいた。

～水害時の医療ニーズは別物と捉えている～

葛飾区医師会 危機管理担当 副会長 三尾仁

葛飾区医師会としての災害医療に対する取り組み

災害時の医療救護に関して、医師会として現在主として考える想定は、地震による被害を想定している。地震による災害時の医療ニーズと水害時の医療ニーズは別物と捉えている。たとえば、阪神の被災状況と、東日本の被災状況は、災害の形態が異なっており、地震による被害では、DMAT(*)のような各病院の精鋭組織が地域に入っていき、初期治療を開始することが可能であったが、東日本の場合は、津波による被害がメインであったため、津波に流されてしまった被害者に対して、DMATは、全く手が出せない状況であった。また、津波を逃れた大多数の傷病者は、外傷ではなくむしろ通常の医療の延長である、持病の薬や、透析の管理が出来ないというような状況に追い込まれてしまった。さらに石巻においては、海沿いにあった市民病院や医療機関は、津波で使用不能となり、高台にあった石巻日赤に患者さんが集中することになってしまった。葛飾区においても、かつてのキャサリン台風のような全区的水害が発生した場合、災害時の医療救護活動を開始するためには、現状では、水が引かなければ全く手が出せない状況である。今の時点で区民の方々に水害時の対策としてお願いしたいことは、各自で持病の薬を1週間分ぐらいキープしていただくという自助努力をしていたきたい。数日間の内に医療機能が少しずつ回復するまで各自で耐えていただくしかないと考えている。

葛飾区内には、災害時の拠点となる病院が3病院あり、その③病院を中心に支援に当たる病院、救急医療救護所などをたちあげ、災害時医療活動を行う計画である。また、この地域では、松上に新しい病院が計画されているが、その病院建設にあたっては災害時の対応ができる病院として立案していただくよう、区に要望を出している。また今後の大きな課題として、2025年になると全人口のなかで高齢者の占める割合が劇的に高くなる。

地域のインフラやシステムを支える上で、この問題は災害医療を考える上でも大きな問題となり今後の計画策定のなかで対策を考える必要があると思われる。

新小岩地区の新病院について

新小岩地区の新病院については、医師会と葛飾区の間で、何回も検討を行い、医師会からいくつかの要望を出しました。そのもっとも確信の部分は、2025年問題をふまえて、高齢者

に対応する病院を作っていただきたいという点、もう一つが災害時の拠点となる病院を作りたいという点です。

高齢者にとって入院が必要になった際、入院先は住居の近隣の病院であることがなにより望ましいと考えます。生活の拠点と病院が遠く離れてしまう事は、高齢者医療をおこなう上で大きな障害となります。住み慣れた地域で高齢となっても生活できる基盤整備は大変重要です。2 番目は災害時に対応していただける病院を作るということです。トリアージができるスペースの確保や、水害時でも機能が保てる病院建設が必要であると区のほうにお願いしています。今回の病院建設にあたっては、上記の内容をふまえた病院建設がふさわしいと葛飾区医師会は考えております。

災害時の対応で地域住民の方々に準備をお願いしたい事

医師会は災害時の医療救護所で医療に従事という使命を担うことになっておりますが、医療関係者だけでは、医療救護所は運営できません。一番の問題となる点は、災害時に患者さんを医療救護所は病院までどのように連れてきていただくか(運び込むか)ということです。平時においては消防が救急搬送を担い、患者さんを病院まで救急車で運んでくれますが、非常時には、災害現場からの搬送で手一杯の状況になることが予想され、全ての患者さんを搬送する事は、困難であると想定されています。

そのための患者さんを自ら運ぶ訓練を日ごろから行なう事がたいへん重要なこととなります。住民の方々におかれましては、ぜひ「搬送の訓練」をしていただきたいと葛飾区医師会では考えております。この搬送に関しては、消防士さんたちがプロ中のプロです。できれば消防士の方々に一般人でもできる搬送法の指導をお願いしたい、もし消防士の方々の手がたりなければ、医師会の災害対策委員が基礎部分でしたら、お話や訓練を企画いたします。担架を使う側、担架で運ばれる側の両方を体験していただく事は、かならず役に立つ実習になると思います。担架搬送の訓練を是非してみてください。

[Wikipedia] より

*「DMAT」ディーマット(Disaster Medical Assistance Team)

災害派遣医療チーム(さいがいはけんいりょうチーム)とは、医師、看護師、業務調整員(救急救命士・薬剤師・臨床工学技士・臨床検査技師・理学療法士・作業療法士・放射線技師・社会福祉士・コメディカル・事務員等)で構成され、地域の救急医療体制だけでは対応出来ないほどの大規模災害や事故などの現場に急行する医療チーム。日本 DMAT、都道府県 DMAT があり、前者は大規模災害時に全国から派遣され、広域医療搬送・SCU(ステージングケアユニット)・病院支援・域内搬送・現場活動などが主な活動となる。後者は域内災害時において現場医療活動を行う。都道府県 DMAT は 2004 年(平成 16 年)に、東京 DMAT が発足。その他の道府県でも配備が進んでいる。津波や原発事故、慢性疾患への対応など想定外の事態に直面したことにより、DMAT がさらに幅広い疾患に対応できるよう、国は見直しを始めている。

***トリアージ**または**トリアージュ**(仏: triage)は、対応人員や物資などの資源が通常時の規模 では対応しきれないような非常事態に陥った状況で、最善の結果を得るために、対象者の優先度を決定して選別を行うこと。一般には災害医療において、負傷者等の患者が同時発生的に多数発生した場合に、医療体制・設備を考慮しつつ、傷病者の重症度と緊急度によって分別し、治療や搬送先の順位を決定することである。人材・資材が相対的に著しく不足する状況では、全く処置されず結果的に死亡する場合もあることが特徴である。一般病院の救急外来での優先度決定も広義のトリアージであり、**識別救急**(しきべつきゅうきゅう)とも称する。

西新小岩五丁目町会 町山光司会長 ～ 町会長の社会活動はすごい ～

現・新小岩北地区連合町会会長の町山さんに電話インタビューしました。たくさんの役職の話を聞いているうちに覚えきれなくなってきたので一覧化して FAX していただいた。子ども、高齢者、障害をもつ人など、拝見した一覧には42の役が書かれていた。西新小岩五丁目町会会長をたすと43役である。1年を通して、ほとんど休む暇も無く地域の何かをしている。一日に3つもこなすときもある。一人の身では持たないのでは・・・と、お聞きした。いや、要領あれば問題ない、みな意見を聞いて、センター長と相談。そして、みな意見の良いところを取って、何事も決めていく。“聞くことに徹すると見えてくるものがある”という。民生委員25年のご経験が生きている。自分は橋渡し役であるという。行政連絡会議は月一回ある。19葛飾区連合町会。この行政連絡会議でさまざまな情報を共有していく。区行政の中枢を担っているのは、まさに町会長さんたちなのだ！と感服する。葛飾で出会った町会長さんたちは多くの社会活動をしている。地域による、地域のための思い、地域愛があふれていると思う。電話での短時間のインタビューでしたが“聞くことに徹する”この理念が素敵です。さらに学生時代からの「チェロ」は都民交響楽団の一員として活動してきた、趣味を超えている。1日30分から1時間の練習は今も欠かさない。“人生どう生きるかです”とお元気な声が戻ってきた。町山さんの役職を書き出してみた。壮観である。

西新小岩五丁目町会会長、新小岩北地区連合町会会長、上平井小学校評議員、民生委員、児童委員、上平井小学校わくチャレトップリーダー、西五福寿会会長、西新小岩交通安全協会支部長、清遊の家すずらホーム理事・評議員、うらら保育園理事・評議員、たつみ保育園理事・評議員、学校法人まどか幼稚園評議員、新小岩まちづくり協議会常務理事、葛飾区清掃協会常務理事、社会福祉協議会常務理事、社会福祉協議会企画財政委員会理事、社会福祉協議会会員協力員委員長、葛飾警察新小岩北地区防犯支部長、本田消防署新小岩北地区防災支部長、本田消防署消防団第5分団支部長、NP0ア！安全・快適街づくり福理事長、葛飾区不法投棄防止協力員理事、赤十字葛飾支部協賛委員、新小岩北地区青少年育成委員会顧問、上平井小学校避難所運営委員長、上平井小学校わくチャレ運営副委員長、東京米穀小売商組合理事、東京米穀小売商組合第5支部長、東京米穀小売商組合監査、天祖神社責任総代、西五神興会相談役、西五子供会顧問、新小岩地域ふれあいまつり実行委員長、葛飾区ふれあいRUN フェスタ実行委員、葛飾区フードフェスタ運営委員、西新小岩モンチッチ防災公園検討委員会委員長、葛飾区高齢者クラブ連合会事業部長、葛飾区高齢者クラブ連合会広報誌編集長、葛飾区高齢者クラブ連合会創立50周年実行委員長、葛飾モリゾー事務所相談役、上平井小学校地域応援団副会長、上平井小学校100周年実行福委員長、上小松小学校地域応援団委員、新小岩北地区小地域活動実行委員長

(インタビュアー 渡邊喜代美)

西新小岩三丁目町会 鈴木一喜会長 ～町会長は輪(和)をもって勤める～

Q 鈴木さんは、とても長く地域づくりに関わってらっしゃる

いや、地域づくりというか、町会というのは行政から見た場合、任意の団体です。行政では隅々までいろんなこと出来ないから、町会にお願いしてくる。でも町会の力というのはゼロに近い。極端な言い方をすれば権限は一切町会には持たしていただいております。皆さんには、そういう前提から、考えていただきたい。だから、まちづくりとかは、町会は希望は述べられますけど。地域の中で一番大きい組織の町会は、まちづくりやなんかに、相当関われるかなと皆さんが思うと、大間違いです。三丁目は行政に登録されてる所帯数は1,550で、町会に入っているのは約1,000。基本的に最近、行政もサービス良くなったから、町会や地域のいろんなことで、意見を聞いていただけるけれど、過去は上意下達。20年くらい前の現実、区会議員を伴うと、まあある程度のところまでは行政が受けてくれる。現在のところは、非常に行政がサービス良くなった。

Q PTAの活動歴も長い

子供が4人で結局、会長6年。私もそれまではPTAなんてのは、女房が行くものだと思って、ノータッチだった。上平井小学校の70年のときに副会長としてPTA入り、90周年で、実行委員長。当時は周年行事やるのに寄付集めが大変でした。去年が100周年です。

Q NPOとかかわりや防災活動についてお訪ねしたいのですが

当時、私、釣りが好きでね、マイボートをもっていった。NPO活動で、川の温度、土手の温度測定に協力した。それと前任の会長は大正12年生まれで関東大震災体験者。防災活動は前任会長が非常に一生懸命進んでやった。うちの町会には、一時避難所3か所に各地域の方が集まって、一番安全なのは、土手だろうと言うことで、土手を渡って、蔵前通りの手前で降りて、新小岩公園に。新小岩中学あたりに、備蓄物資を置く。大体800から1,000人分だね。3町会で、うちが1,550。中町が700、リバーさん（西新小岩のマンション）は、高い建物だから、水の場合にはどうってことないが2,200所帯で約5,000人。人数から行くとまあ、備蓄も不足、避難も絵に描いた餅。自分だけ生きようなんて気はないがね（笑）

Q 輪中会議は先に予定が無ければ必ず参加する。

NPOや大学とこうやって、連合町会がお付き合いしているのは良い面がある。葛飾区は19連合町会あるけど、いろんな勉強や交流をした結果、ここは評価されてきたんじゃないの。

Q 鈴木さんの場合“ふわふわ”した運営方法？

バランスだよ。長として個性は出さなくて、でもやっぱり組織であるから、各部、役員さん、何かあった時には、責任はいつも取ろうと思っている。町会トップとして、いつでも責任はとれるよ。前会長が、商人出身だから、町会財政はまあ私もそれを継承してやっている。盆踊りや、お祭りにしろ。大口寄付が無くなっちゃったから。昔とはちがうね。

鈴木町会長は、町会活動は住民に合わせて行うのが心情。町会は地域密着型ミニ行政といっているほど、たくさんの仕事と気配りがある。鈴木町会長は“輪をもって勤める”と終活の思いでいる。大勢の前での素晴らしいスピーチなども、日ごろの活動の柔軟性が現れているのだらうなと感慨深い。敬礼します。（インタビュー 渡邊喜代美）

防災もまちづくりに新たなツールを使って活性化

東京大学加藤孝明研究室

吉岡佑（修士課程）

（現在就職して関西人してます）

私は加藤孝明研究室のメンバーとして、葛飾区新小岩北地区の活動にかかわらせていただき、荒川での乗船体験、輪中会議にも参加させていただき、他にも面白い取り組みが盛んに行われていることを知りました。その中で、もっとこの取り組みを地域の多くの方、特に興味があっても忙しくてなかなか参加できないような現役世代、若い世代の方々に知ってもらい、そしてこの取り組みを地域全体でもっと盛り上がっていくように、研究によって貢献したいと考えました。

今までもシンポジウムやパネル展示などの広報活動を通して輪中会議や取り組みのメンバーを少しずつ増やしてきたと思いますが、もっと多くの人、一般の住民の方々を巻き込んで盛り上げていくためには、単なる広報だけでは不十分であることがわかりました。直接は参加できないような人でも、地域の取り組みに興味を持っていたり、取り組みのアイデアを持っている人はまだまだいるはずです。そのような方々を巻き込んで行くためには、地域の災害リスクや行われている取り組みなどを、「一方的」に広報しているだけではうまくいきません。重要なのは「双方向」のやりとりをすることです。輪中会議でもそうしているように、お互いに意見や感想を交換しあうことで、より関心を持ってもらうことができるようになります。

直接取り組みに参加できない方々と双方向にやりとりをすることは難しいですが、それを実現する方法として、新しいツール、Facebook を利用することを提案しました。Facebook はインターネット上でさまざまな人が発言したり写真を載せたりして交流できるサービスですが、そこに輪中会議のホームページ（Facebook ページといいます）を作ります。Facebook ページに町会や学校など地域の主体が取り組んだことを書き込んで Facebook を使っている方々から意見や感想をもらったり、この Facebook ページの利用者から取り組んでいる活動やアイデアを募集して、それを輪中会議の議題の一つにして輪中会議の場でも話し合うなどして、双方向に情報を出し合って共有し、交流することを実現し、より多くの地域住民の方々を巻き込んでいくことを目指します。直接取り組みに参加できないような若い世代の方々は、ほとんどがインターネットや Facebook を利用していると考えられるので、そのような若い世代を巻き込むために大変有用であると考えられます。輪中会議などの実際の現場での取り組みと合わせて、このような新しいツールを利用していくことで、これからさらに地域を盛り上げていけたらと思います。

新小岩北地区のインタビューの報告 — 地域づくりへのモチベーション —

東京大学都市工学専攻（加藤孝明研究室）修了生

色田 彩恵

私は今年 2015 年 3 月、大学院の修士課程を修了しました。研究室にいた 3 年半の間、新小岩や釜石など、様々な地域で住民の方々が中心となるまちづくりの現場を見せていただく中で、その地域で暮らす住民が地域づくりに関わることの必要性や、住民の方々が楽しんで地域づくりに関わること、またそれができる状況づくりの大切さを感じました。そこで、修士の研究では、住民の方が自分の地域について考えたり、地域を良くする活動をしたりすることへのモチベーション（＝やる気、熱意、楽しみ、前向きさなど）に着目し、それが高まったり、逆に下がってしまったりすることの原因は何なのかを考えました。その研究の中で、実際に地域づくりに携わっていらっしゃる新小岩北地区の町会の 8 名の方々にご協力いただき、インタビューをしました。ここでは、「NPO ア！安全・快適街づくり」が参加する、住民や大学、地域の団体などの様々な主体が連携して水害に強い地域づくりを考える活動に関連した内容をご報告します。

インタビューの内容は、▼皆さん個人の、地域活動にまつわる経緯▼そこでの出来事に対する当時の思い▼同様に、当時のモチベーションの高さ▼なぜそのような思いやモチベーションを持ったのか、といったことをお聞きしました。皆さんはお忙しい中、多くの時間をかけてお話くださいました。それだけ皆さんの地域活動の経験の厚みや、地域への思いがあるのだと感じました。また、地域の町会活動が、とても高度な組織運営や、人間関係の微妙なバランスを保つ努力によって営まれていると知り、大変驚きました。

このインタビュー調査を通じて、地域の方々のモチベーションが上がった要因を知ることができました。その一部をご紹介しますと、例えば Aさんは、活動の情報共有の場【輪中会議】で他の町会の取組みや参加者の積極的な姿勢に触れ、「自分の町会もああなりたい！」という気持ちで、モチベーションが上がり続けたそうです。また Bさんは、最初は NPO がどんな組織なのか見えず、活動への参加に警戒心がありましたが、NPO の目的やどんな人が参加しているのかがわかるにつれ、活動が自分にとっても役立つものと感じられ、積極的に参加するようになったそうです。さらに、Cさんは、数十年前から地域での水害対策の重要性を感じ、周りの共感が得られない中で一人孤独に啓発活動に取り組んでいたところ、自分と同じ危機意識を持った人がいると知ったことで、同志を得た喜びでモチベーションが急上昇したそうです。

新小岩地域における水害に強い地域づくりを考える活動には、住民の他に、地域の団体(学校や消防署、保育園など)や、大学、NPOといった専門的な知識を持つ人たちも参加しています。しかし、今回の調査では、地域の住民の方々が、専門家などの外部の人ではとても敵わないような、地域(地理的な面や、地域の人間関係の面など)についての豊富な知識や経験を持っていることがわかりました。こうした住民の方々の力が、災害に強いまちづくりに限らず、地域の暮らしをより良くすることには、不可欠なのだと思います。さらに、新小岩地域での取組みのように、住民の方々とは違った知識や能力を持った専門家や企業、学校や消防署などの主体が、住民の方々と連携して、地域について一緒に考えたり取組みを創っていったりすることで、お互いが刺激を与え合ってそれぞれの力を高め、地域全体として、より大きな力を生むのだろうと感じました。

また、今回お話を聞いた方々は、皆さんそれぞれが地域活動に対する想いを持って、それぞれのやり方で地域活動を支えている方々ばかりでした。一方で、住民の方々の中には、そうした人たちほどは積極的にはなれない、という方もいると思います。しかし、そうした方々の中から、少しずつ地域に興味を持ったり、考えてみたりする人が増えていくことが、地域全体の雰囲気が良くとともに、積極的に活動する人たちの後押しにもなるのだと、今回のインタビューで感じました。

今回、インタビューを受けてくださった8名の皆さんのお話を聞いて、私は皆さんが心から地域のことを思い、少しでも地域を良くするべく尽くされていることに、とても感動しました。また、「地域を良くする」と一口に言っても、その方向性や姿勢には様々なあり方や考え方があり、それぞれに工夫があるのだと知り、その高度な内容から、まちづくりについて多くを教えていただいたように思います。そして、私の研究の原点である、地域づくり活動を「楽しむ」ということを積極的に実践なさっている方々がいることや、地域社会の持続可能性のための自立的な考え方や取組みが行われていることもわかり、そうした地域の皆さんの持つ創造性の高さをあらためて感じました。このように、自分のできるところから、創造的に解決策や改善策を考え、実際にやってみるという姿勢は、今後、私自身が社会で活動する上で、大いに見習い実践すべきだと思いました。

私の就職先は新小岩地域とは別の場所ですが、まちづくりを実践する仕事に就くことができました。これからも新小岩の皆さんには、地域づくりの先輩として、いろいろとお教えいただいたり、一緒に経験させていただいたりすることがたくさんあると思います。今後ともよろしくお願いいたします。



3月28日輪中会議での地域の皆さん

これからの自分の活動において大きな糧

芝浦工業大学 環境システム学科
地域安全システム研究室 4年 眞船聖吾

「今度会議に参加してみない？」先輩のこんな一言がきっかけで参加するようになったこの輪中会議。2014年、当時の私は「防災」について、勉強を始めたばかりでした。その頃の私は、防災と言えばハード面の整備が急務と思っていました。しかし、ソフト面における対策も必要であり、そのことに気付かせてくれたのが、この輪中会議です。この会議は地域から防災を考えるといったテーマのもと、これまでに様々なことに取り組んできています。高台化の勉強会、洪水、浸水の危険性の啓発活動、操船技術の向上、等々。そのうちの1つにこの会議を象徴するような活動、現代の狼煙、赤旗白旗があります。この活動は取り組みやすく、住民一体となって取り組むため、横の繋がりをつくることに關しても素晴らしいものがあります。輪中会議に参加して、地域から取り組む防災に直に触れられることは、これからの自分の活動において大きな糧となります。こうした活動を他の地域においても広く展開していきたいと考えます。

皆さんの溢れ出るパワーに衝撃を受けました

芝浦工業大学 環境システム学科
地域安全システム研究室 4年 鈴木 正好

私が輪中会議を知ったのは昨年春ごろ先輩の活動に参加させてもらったことがきっかけでしたが、そこから一年間ほど活動に顔を出させていただく中でいろいろなことを感じました。ひとつは「驚き」です。実際に輪がどんどんと広がっていく様を目の辺りにし、皆さんの溢れ出るパワーに衝撃を受けました。実際にそこに住みながらまちをよくしようと活動する人々の活気を目にする機会がこれまであまりなかったため、このような生々たる皆様の存在に単純に驚きました。加えて「将来」、地域で熱心な活動をされる方々の一助となる、という自分が今後目指していく理想にも気づかされ、それが大学で日頃から勉強している内容をより洗練することで可能だと知ることができました。未曾有の水害という自然の脅威からまちを守る「輪」の姿をもっと多くの方に知ってほしいと願いつつ、私自身もなにかお手伝いできればと思います。

輪中会議の地域全体で意識を高める機会はすばらしい

芝浦工業大学 環境システム学科
地域安全システム研究室 4年 細渕 勝

この度は、貴重なお話を聞かせていただきありがとうございました。葛飾区は、洪水に対する脆弱性が常日頃から指摘されており、今回の輪中会議のように地域全体で意識を高めるといった機会は非常に大切なことで、もっともっと日本全国でも同じような試みがあってもよいのではないかと私は感じました。2015年3月28日の輪中会議では、「有事の際に備え、持病の薬を余らせて持っていて欲しい」といった話が気になりました。これは、私にとっては盲点であり、確かに薬は災害時に必要だと感じました。しかし、病院のお医者さんは必要以上の薬を一度に出すのを嫌がる人が多いという気がします。このようなことへの事前の対処も踏まえ、防災への市民の意識は職業を問わず、全体を通して浸透させねばならないと思いました。しかしこれは輪中会議参加してみて実際に災害が起きたことを想定しなければ思いつきませんでした。こうしていろいろな立場のひとの考えや試みを出し合い、意見をかわすことができるのが輪中会議のすばらしいところであると思います。

二上小学校における「石川理事長」の特別授業

東京大学工学部都市工学科 環境デザイン研究室 柳沼翔平

2015年1月17日(土)の「葛飾 教育の日」に、二上小学校第五学年生約60名を前に、石川理事長が「大きな地震が来たとき、あなたならどうする」というテーマで特別授業を行いました。

授業はパワーポイントを用いて行われました。はじめに、川と河の言葉の使い分けや荒川と中川の堤防幅の違い、川の水位が建物の2階程の高さにあることを示し、生徒に身近な河川について話すことからスタートしました。荒川の下流が人の手によって掘られた事をほとんどの生徒が知っており、日頃とてもよく地域について勉強していることが伺えました。

次に、荒川の上流、中流及び下流の地について説明し、同時に土砂が下流に流れるにつれ小さくなる現象を示し、河口に位置する新小岩付近の地盤が細かな柔らかい砂の上に形成されている自然条件を分かり易く説明しました。そして、砂の粒子と粒子の間には隙間があること、そして隙間の水が抜けると体積が減ることを、卵と豆腐という馴染みやすいものを使って示し、街の地盤が沈下した仕組みを説明しました。

また、地盤が下がったことにより堤防を高くしたために、かつては家から見えた川の水面が今では全く見えなくなってしまったことを説明しました。丈夫な堤防ではあるけれども、自然の力は人間の知恵を超えるものであり、どこか一つ堤防が切れたら大変なことになることを語りました。頑丈な堤防も阪神淡路大震災時に淀川の堤防のように壊れることもあることから必ずしも万全ではないので、大地震により万が一堤防が壊れ街に水が押し寄せてきた時は近くのマンションなど高い建物や高台に逃げる必要があることを訴えました。

次に、東日本大震災の時の塩釜市の事例を説明しました。子供達は、学校での防災教育のお陰で、津波から身を守るために自ら判断してテンデンコに高台に逃げ、大人もそれに倣い避難したために、被害者の数が驚異的に少なかったことを紹介し、学校での防災教育の重要性を指摘しました。また、親子の信頼があるからこそテンデンコに逃げる事ができたことと訴え、

普段から家庭で災害時にどう行動するのか話し合っておくことが重要であることを伝えました。

授業は、生徒が床に腰を下ろしながら45分間という比較的長い時間行われましたが、パワーポイントの画面が小気味良く展開し、時折、生徒に問題を投げかけるなどして行われたため、寒い中にも関わらず生徒の集中が途切れることなく、自然災害に対する知識と子供と親と一緒に災害について考えることへの重要性を改めて認識する一助になった様子でした。

大規模水害から首都圏を守るための取り組み

国土交通省 関東地方整備局

荒川下流河川事務所長 里村 真吾

我が国は、その急峻な地形などから歴史的に多くの水害に見舞われてきましたが、近年の地球温暖化に伴う異常気象により、水害が局地化、集中化、激甚化しており、時間50mmを上回る豪雨が全国的に増加するなど、雨の降り方が変わってきています。また昨年は、水害の他に、土砂災害や地震、大雪、噴火といった災害による被害が各地で発生しました。

荒川の流域においても、歴史的に多くの水害を経験しており、特に大きな被害が発生した明治43年の洪水を契機に、現在の荒川である放水路の建設工事が開始されました。放水路の完成後、沿川には、我が国の社会経済活動の中核機能が高密度に集積し、地下空間も高度に利用されています。またその一部はゼロメートル地帯となっています。過去の大災害や、近年の他地域での災害から日々学び、荒川下流部の地域が抱えるリスクを十分に認識した上で、防災・減災の取り組みを進めていく必要があると考えています。

平成24年に米国を襲ったハリケーン・サンディは大きな被害をもたらしましたが、ニュージャージー州等ではタイムラインという取り組みが人的被害の軽減に大きな効果を発揮しました。タイムラインとは、「何時」「何を」「誰が」を明確にした災害時の行動計画です。例えば、台風上陸の三日前に施設の点検をする、二日前には避難所の開設準備をするといったように、台風の接近に合わせて具体的な防災行動を整理したものです。災害時には防災行動のチェックリストとなるだけでなく、判断のサポートツールとしても活用できます。また、平常時には、関係機関のコミュニケーションツールにもなります。

米国とは気象条件も防災体制も異なる我が国ですが、このタイムラインを適用すべく、荒川下流河川事務所では全国に先駆けて、右岸側の地域（北区、板橋区、足立区）をモデル地区として検討しています。今年度の出水期までにタイムライン試行版を作成し、運用するとともに、その過程で抽出される課題等を踏まえ、荒川の沿川地域全体に取り組みを広げていきたいと考えています。

このように、荒川下流河川事務所では、新たな取り組みも含め、リスクを最小化する取り組みを進めております。また、今年度は、河川整備計画の検討も本格化させています。NPO法人ア！安全・快適街づくりにおかれましては、シンポジウムや輪中会議など、地域の防災力を向上させる取り組みを、熱心に継続されております。引き続き、安全・安心で快適な地域の実現を目指し、皆様とともに防災・減災について考え、協働してまいりたいと考えておりますのでよろしくお願い申し上げます。

□ 1年間をふりかえって

政策経営部協働推進担当課長 土屋俊昭

昨年4月に地域振興部防災計画担当課長に着任し、葛飾区新小岩北地区ゼロメートル市街地協議会の構成メンバーとして、安全・快適まちづくり輪中会議に参加させていただきました。皆様には色々とお世話になり、本当にありがとうございました。1年間という短い時間でしたが、自治町会をはじめ、地域団体、NPO、専門家、国土交通省の皆様と大規模水害に備えた活動と一緒にあって情報を共有し、学び、考え、取り組みできたことは、自分自身の大きな財産となりました。この4月からは、政策経営部協働推進担当課長に人事異動となりましたが、今後とも様々な機会や場でお会いすることがあるかと思いますので、引き続きよろしくお願い申し上げます。

□ 強い印象を受けた、輪中会議に参加されているお一人おひとりの活動

葛飾区役所地域振興部防災計画担当課長 小野村 守宏

輪中会議にご参加されている皆様、はじめまして。防災計画担当課長の小野村守宏です。

皆様の活動を2年前に知り、強い印象を受けたのを覚えています。当時、私は政策企画課協働推進担当におり、区が進める「協働」の事例を調べていました。そこで、以前防災課にいた村杉係長から、輪中会議や紅白の狼煙、オリジナルの災害旗、マークシートの配布、ボートを使った訓練、小中学校への防災教育など、様々な活動を紹介され、多くの方々が「協働」し素晴らしい街づくりをされていることに感心しました。

これからも皆様のご活躍に期待しております。

なお、私は、生まれは小岩、育ちは柴又、学生時代は新小岩のビリヤード場でアルバイトをしていました。今後、どうかよろしくお願いいたします。

□ 輪中会議のおかげで27年度も水害対策担当になりました

葛飾区役所地域振興部防災課計画係 大田 聖家

私はもともと、27年度は水害対策担当から外れる予定だったのですが、3月28日の輪中会議の場で「担当をやめないで」というお声を上司の前でいただいたおかげで、27年度も引き続き水害対策担当となることができました。ありがとうございます。これからの一年間も、皆さまと一緒に活動ができることを楽しみにしています。今年度は、フィールドワークにも参加できればと思います。よろしくお願いします。

□ 平成26年度の輪中会議を振り返って

街づくり計画担当課長 泉山 省吾

平成26年度の匳飾区新小岩ゼロメートル市街地協議会の取り組みは、区の洪水緊急避難建物や国の河川防災ステーションなど、行政が推進している避難対策や治水対策への理解を深度化させる内容を中心して取り組んで頂きました。

また、輪中会議メンバーによる近隣地域への働きかけや、NPO法人による地元小中学校への草の根的な講習会活動を積極的に実施していただき、開催当初以来、参加団体も確実に増え、輪中の「輪」を拡大させながらの活動が一層進んでいると感じています。

□ 輪中会議を地域の皆様に進めていただいて

街づくり調整課長 関口 薫

当区の治水・水防を管轄する私たちは、区民を中心とした会議体でありながら、大学・区・国がひざを突き合わせて真剣に検証する本気の協働の場として、この輪中会議の取り組みに大きな期待を寄せています。

新しい公共事業のモデル的な取り組みから始まった輪中会議が、こうして発展しながら継続していることは、匳飾区にとって大変心強く、本当にありがたいと感じています。皆様の熱意を目の当たりにして、区も都や国に働きかけながら精一杯取り組みを進めて参ります。

*****区ご担当からのメッセージをお世話くださった太田さん*****

匳飾区役所 地域振興部 防災課 計画係

大田聖家 ohta seiya

低地帯の水害対策

中原光敏
(前) 本田消防署長

葛飾区は高低差のない街であり水害対策を充実させなければならないという課題を背負い、平成24年10月1日本田消防署に着任いたしました。最初に着手したのは、荒川堤防の決壊時に、消防署、出張所全て水没することがわかり、住民に対する消防として何ができるかを真剣に悩みました。

そうしたなかで、葛飾区が制作した荒川、江戸川ハザードマップを眺めているうちに、浸水被害のない地域を発見することができ、ここから一発目のスイッチが入り、早々、消防署員のスタッフで検討会を設置し、短期間で対策を樹立することが出来ました。

2発目のスイッチは、当時、上平井出張所長として勤務していた菊川係長からの紹介により、NPO ア！安全・快適街づくりの皆さんや、東新小岩7丁目町会長の中川会長との出会いでありました。

住民の皆さんがすでに浸水対策に取り組んでおられることに感銘を受け、浸水時に消防署として対策を樹立したものの、住民の防災リーダーである、本田消防団には、何も装備が無く、毎年、繰り返し訓練してきた水防工法では、到底歯が立たないと思い、浸水時の住民の救助・避難誘導活動を消防団が担うという、茶番的な発想に憤怒し、消防署と同じ救命ボートの配備が急務であることを、葛飾区に機会あるごとに訴え、平成26年度、消防団に3隻の救命ボートを無償で配備していただきました。一隻が百数十万もするボートを配備いただき、住民の皆さまにすこしでも安心を与えるための水防訓練を中川で実施させていただきました。

しかし、本田消防団には、16個分団がそれぞれ地域住民に密着していることから、時間がかかっても全部の分団に、救命ボートを配備していただくことを願っております。

重要な課題を完全には解決できませんでしたが、葛飾区の災害対策、とりわけ、浸水対策の先駆けとして道筋を通すことができ、安心して本田消防署を、東京消防庁を勇退することができます。地域の皆さま、NPO 法人の皆さま、区長をはじめ、区役所の皆さまには、大変お世話になり、衷心よりお礼申し上げます。

消防の言葉に「訓練に終わり無し！」という言葉があります。浸水対策は、消防だけでなく、地域の皆さま、官民間わず、協働での訓練が大切であると思いますので、引き続き継承をお願いいたします。

結びに、葛飾区が災害のない、災害に強い街になりますことをご祈願申し上げお別れの挨拶とさせていただきます。

お世話になりました。有難うございました。平成27年3月吉日

新小岩ゼロメートル市街地と地域のまちづくりに「防災」も貢献！

菊川隆憲

(元) 本田消防署上平井出張所

(現) 危険物保安技術協会勤務

元本田消防署上平井消防出張所に勤務していました菊川と申します。微力ではありますが、約6年間葛飾区の消防署で地域の防災力向上に取り組んできました。

私の勤務地は、葛飾区内の中で最も南側に位置する新小岩地域（新小岩、西新小岩、東新小岩の町会）を管轄する消防出張所に勤務、老朽化した庁舎には職員29名、消防ポンプ車2台と可搬ポンプ1台、救命ゴムボート1艇が装備された小規模な庁舎でした。

その他に葛飾区内地元の本田消防団3個分団が配備され消防力を高めている地域もありました。その強力なバックアップが新小岩北地区連合町会、新小岩地区連合自治町会、新小岩まちづくり協議会、各NPO団体・各町会の自主防災組織である市民消火隊等の強力援護を頂戴し、新小岩地域の防災力の向上と地域住民と一緒に協働して各種防災訓練や防災イベント等を推進してきた経緯がありました。

中でも、新小岩北地区は地域特性でもある中川の旧七曲堤防という蛇行した河川構造の地形で、葛飾区中川・綾瀬川洪水ハザードマップによると超大型台風が東京地区を直撃上陸した場合、地域全体が広域市街地ゼロメートルのため、浸水3メートルに達すると予想されている。このような地域特性からゲリラ豪雨や水災害等に関する危機意識が極めて高い地域町会でもありました。

新小岩北地区の連合町会は、以前から浸水被害を想定し、住民自らが隣接の姉妹都市の千葉県市川市防災公園まで避難する等、大規模水害に備える訓練を実践している。

多くの学識経験者が協力して活動しているNPO法人ア！安全・快適街づくり、広域ゼロメートル市街地研究会や新小岩北地区ゼロメートル市街地協議会等々の団体や代表の方々との出会いと各シンポジウムでの意見交換会である。これほど地域のために真剣に防火防災、台風、水害等に取り組んでる地域の皆さんの姿勢に驚きました。防災機関としての消防署の無力さを痛切に感じました。地域の住民の皆様に水害の怖さを伝えるための努力をされている各種の団体の活動に感動を覚えました。

そこで、消防機関としてどのような協力ができるのか熟慮したのが、東京消防庁が主催する**第7回地域の防火防災功労賞**の募集において風水害等自然災害に関する町会・自治会等が主体となった地域の取組みについて応募することにしました。

募集のテーマを「東新小岩七丁目町会の団体が水害を想定～住民自身が救命ゴムボート（船外機付き）で救出訓練を実施」した経緯等を論文にして紹介したところ、その結果は、上位の優秀賞 消防総監賞を受賞できました。

第8回地域の防火防災功労賞では、募集テーマ「新小岩ルミエール商店街をモデルに商店街の防火防災力向上の取組み」を論文に新小岩地域の町会、商店街、区役所や行政等と一緒に取り組んでいる状況を紹介した論文にしました。

第9回地域の防火防災功労賞募集では、「新小岩南地域まちづくり協議会による地域的かつ総合的な防災への取組み」について応募しました。毎年開催される新小岩ふれあい祭りを例に新小岩の北地区と南地域が団結して一致協力している地域最大のイベント行事にな

っており、消防署も防災機関として地域の消防団・防災ボランティア、少年消防団等も協働して参画して防災力の向上と取組等を紹介しました。

第10回地域の防火防災功労賞募集の論文は、新小岩ゼロメートル市街地における大規模水害対策への取組みと題しての応募結果は、防災救急協会理事長賞を受賞、さらに総務省消防庁が主催する**第8回全国「防災まちづくり大賞」**という防災コンクールに同じ内容で応募したところ、「新小岩北地区連合町会」「新小岩北地区ゼロメートル市街地協議会」の団体が最高賞である**総務大臣賞**を受賞できたのです。

「防災まちづくり大賞」は、地方公共団体や自主防災組織等における防災に関する優れた取組み、工夫・アイデア等住宅防火・防災に関する幅広い視点から効果的な取り組みを推奨し、もって地方公共団体等における災害に強い安全なまちづくりの一層の推進に資することを目的に創設されています。

この新小岩地域の各種団体は、10年以上に渡り大規模水害に備えての地道な勉強会や救命ゴムボート訓練、NPO団体や大学関係者などと連携しての防災学習用アプリ「天サイ！まなぶくん」の開発や防災シンポジウム等の開催、イベントの実施など、新小岩市域の防災力向上への取組みが評価されたものだと考えます。

全国的にも防災意識が高い葛飾区新小岩の町を紹介、総務大臣賞を新小岩地域が受賞できたことが最高の喜びとなり、地域の方が一同に参加された受賞報告会まで盛大に開催していただきました。

このように地域全体が地域の安全・快適に取り組んでいる新小岩が大好きです。

去る、平成27年3月末で東京消防庁に42年間勤務、最後の年に葛飾区の本田消防署上平井出張所（新小岩地域）に勤務、健康で元気に退職できたこと、多くの各種団体の方々と「防災」を通じて絆を共有できたこと等に誇りを感じています。

皆様の長年のご支援ご協力に心から感謝しています。ありがとうございました。

東京消防庁を退職後、平成27年4月1日から港区虎ノ門にある「**危険物保安技術協会**」に就職しました。当協会は、危険物等の貯蔵、取扱い又は運搬に関する保安の確保を図ることを目的として設立されました。業務内容としては、石油等の危険物を貯蔵する屋外タンク貯蔵所（大規模な石油コンビナート）の安全性についての設計審査、保安審査等を行うとともに、当協会が有する専門知識、技術、経験を活用して、危険物等に関する安全対策の向上に資するための各種の技術援助、調査研究を実施しているところです。

新しい職場で二ヶ月が経過しましたが、危険物保安技術協会の事故防止調査研修センターの研修課という所に所属、全国各地域に出向いて危険物等に関する幅広いテーマについての各種講習会、事故事例セミナー・事故防止セミナー等々を開催する仕事に従事しています。葛飾区で培った地域の連携（自助・共助・公助）を基にして今後も当協会の職務に専念したいと考えています。ありがとうございました。

危険物保安技術協会
事故防止調査研修センター
研修課 菊川隆憲
電話 03-3436-2357

平成 26 年度の活動結果について

NPO ア！安全・快適街づくり

事務局長 宇賀俊夫

26 年度の活動結果についてご報告いたします。

この年も前年に引き続き「葛飾区新小岩北地区ゼロメートル市街地協議会」(当 NPO と葛飾区役所、新小岩北地区連合町会、広域ゼロメートル市街地研究会、NPO 日本都市計画家協会の 5 団体で結成)主催の輪中会議を 7 月、10 月、27 年 3 月と 3 回にわたって開催しました。特に 27 年 3 月の会では、初めて医療関係の方にも参加いただいたこと、東新小岩 7 丁目町会の皆さんによる赤旗・白旗を使った避難訓練の報告や、西新小岩 3 丁目の有志の皆さんによる高台整備に関する勉強会の報告などがあって充実した会となりました。輪中会議は今後も引き続き開催して参ります。

西新小岩 3 丁目の有志の皆さんによる高台整備に関する勉強会については NPO が全面的に運営を支援し、原則として毎月第 1 土曜日の夜に会合を開いています。第 8 回の輪中会議ではその勉強の成果の一つとして新小岩公園隣接地に河川水防ステーションが建設されること、蔵前橋通りと堤防道路の平面交差化がなされること、小池化学の先から新小岩公園までに都の企画による緩傾斜堤防が設置されることなどの動きに対処して、新小岩公園の高台化を図り、水害時の避難場所として整備すると共に、住民票交付機など行政サービスのための設備を設けることなどの提言を行いました。今後も引き続きその実現のために働きかけを行ってまいります。

葛飾区の地域活動団体に対する助成制度を利用した事業としては、これまで新小岩学園・上平井小で実施してきた「災害発生時の避難方法について親子で話し合う」ことを狙いとしたワークシートを二上小で実施し、各家庭の事情に応じた避難方法を明確にし、学校の対処方法に役立てる活動を行いました。この他、上平井小や松上小などで防災に関する出前講座を実施すると共に、上平井中の地域防災研究部(旧理科部)の部活動に対する支援を引き続き行いました。

新しい事業としては土木学会の 100 周年記念事業として行われた助成事業を利用して、東新小岩 7 丁目の皆さんが実施して好評だった、赤旗・白旗を使って災害時に救助の要否を知らせる方法について他の町会にも拡大することを検討し、第 1 ステップとして旗の作成を行いました。今後、希望する町会で避難訓練時に活用していただきたいと考えています。

27 年度から新小岩北地区の 7 つの町会と 3 つの自治会が賛助会員として NPO の会員になっていただくこと、NPO の副理事長に持ち回りで連合町会長が就任いただくことが決定しました。これにより、各町会・自治会の皆様との関係を一層密なものとし、当 NPO の事業により積極的に参画いただくことで、その活動の実を高めていけるものと期待しております。

27 年度も輪中会議の開催、西新小岩 3 丁目有志の勉強会の支援、地元小・中学校での防災教育への協力など実施して参ります。引き続き皆様方のご支援をお願い申し上げます。

平成 26 年度葛飾区地域活動団体助成事業について（報告）

NPO ア！事務局 増澤一郎

本事業が、これまでの葛飾区協働事業から衣替えして 3 回目を迎えた平成 26 年度前期で、当 NPO の申請が認められ一昨年度に続き、次のような活動を行ったので報告致します。

昨年度は、上平井中学校地域防災研究部への研究支援をはじめ、新小岩中学校の避難所訓練参加、二上小学校の校外社会科見学、松上小学校と上平井小学校での出前授業そして、上平井小学校・二上小学校での講演会等を行った。

- 1、上平井中学校地域防災研究部は、平成 26 年 6 月に荒川下流河川事務所「堀切菖蒲水門」見学や地元町会主催の避難訓練参加、8 月に同事務所の「あらかわ丸」乗船体験等を基に、10 月 25 日（土）校内学芸発表会で、その成果を発表した。発表までには、当 NPO や東京大学大学院生等から折に触れ、貴重な助言・指導を受け、パワーポイントを駆使し、部員全員による素晴らしい発表に館内から盛んな拍手が送られた。
- 2、二上小学校第 3 学年生を対象に、9 月 19 日（金）午後、「地域を知る」社会科校外授業で、上平井水門見学及び中川堤防から水面と家の高さを見比べ、自分が住む土地の低さを観察し、帰校後校庭で、タブレットを使ったアプリ、「天才マナブ君」による浸水深さを疑似体験した。後日、水門を説明した東京都職員から、「今迄見学コースの途中で立ち寄るケースが主だった。今回は水門見学が主と言うことで、熱心に聞き、質問もしてくれて非常に張り合いがあった。」と知らされた。
- 3、上平井小学校第 4 学年生対象の 11 月 8 日（土）午前、石川講師による、「大きな地震が来たときあなたならどうする」と題する講演会は、床に座った生徒へ、顔が触れんばかりの近い距離からの語り掛けで始まった。
講師自身が考案した、木綿と絹豆腐、或は卵を積み重ねた分かり易い地盤沈下の説明と、終わりに家庭で親子が語り合って書く、ワークシートの宿題を課して、生徒達に避難訓練の大切さを説いた。
「卵を隙間なく詰めればノーベル賞だよ。」に、多くの生徒は関心を持ちながら、地盤沈下を理解し、「釜石の奇跡」を自分のこととして受け止めた様子が、感想文から読み取れた。
- 4、新小岩中学校から、「3 年ぶりに避難所訓練を町会と一緒に行うので、NPO も参加して欲しい。」との要請を受け、11 月 30 日（日）午前、NPO 会員、学生等が加わり、訓練とパネル展示を行ったが、詳細は別稿をご覧願いたい。
- 5、上平井小学校第 6 学年生を対象に、「安全で快適な街を目指して～水に親し

み水に備えよう」と題する塩崎講師 12 月 13 日(土)午前に出前授業が行われた。

講師の歯切れの良い通る声での授業は、低い土地に住む生徒へ、「水は恐ろしい反面、身近で親しめる面を併せ持っている。」点を改めて気付かせ、街づくりという難しいテーマにも拘らず、平易で丁寧な説明に生徒から、「自分も将来都市計画家になりたい。」との感想が聞かれ、魅力溢れる授業となった。

6、松上小学校第 6 学年生に 12 月 18 日(木)の午前、寺島講師が、「新小岩のあゆみ『川ができ街ができた』」をテーマとする出前授業も行った。

寺島講師による授業は、何代も昔から住んでいる家の人さえ知らない、水害を主とする新小岩の歴史について、手振り身振りを交えた渾身の授業は、すっかり聞く生徒を魅了した。

生徒の顔も生き生きとした面持ちで、講師の話に引き込まれ続け、あっという間の授業時間で、講師の新小岩への思い入れの深さと愛着が感じられた。

7、二上小学校第 4・5 学年生徒に父兄や地元の方々も加わった、石川理事長と極地研岡田先生による講演会とパネル展示を本年 1 月 17 日(土)午前、同校体育館で開催した。

まず、「大地震がおきたらあなたならどうする。」と題する石川理事長の講演は、自己紹介から川と河の違い、荒川の生立ち、地盤沈下等について分かりやすく説明し、釜石の奇跡「年長の子が小さい子を『もっと高い所へ逃げっぺ。』と引き連れ、親達も誘われ避難して助かった。」と語り掛け、如何に日頃の避難についての教育と訓練が大切であることを強調し、結びとした。

生徒から、「家で親と、連絡を取り合う方法や避難袋を話したい。水害の時は 3 階以上へ逃げる。」といった反応が、早速返ってきた。

次いで、「地球温暖化と地域の災害について」と題して岡田先生は、御自身の南極と言う極寒での一年間に及ぶ越冬生活と、ゼロメートル地帯と称される葛飾新小岩での平穏無事な日常生活とを対比され、「皆さんは、地球と言う自然の中で暮らしているのですから、いつ何が起きても不思議ではありません。どうか、命だけは助かるよう日頃から心がけて下さい。」と訴えられた。

当日会場には、1 億年前に閉じ込められた空気の入った氷が置かれ、小さく割る度にシュッ・シュッと発する音に生徒達は歓声を上げ、片や館内の壁に張り出された水害や大震災のパネルに、深刻な様子で見入っている生徒や父兄の姿が印象的だった。

更に、石川講師の、「命だけは助かって欲しい」、岡田講師による、「厳しい環境の中で命は守る」との熱い思いが会場に伝わって来、素晴らしい講演会となった。

このように『避難について』地味でも息の長い多様な活動が、次代を担う子供達の心と体に浸透することを願い、今回も「平成 27 年度葛飾区地域活動団体前期助成事業」に応募し、結果を鶴首している。

新小岩中学校避難所実践型訓練に参加しました

NPO ア！ 総務 山上忠

新小岩中学校は、周辺3町会（西新小岩3、西新小岩1中町、リバーハイツ）の避難所に指定され、定期的に訓練を行っています。学校は蔵前通りに面しており2011年の東日本震災及び同年夏の大型台風による帰宅困難者を2度受け入れた実績があります。今回開催された実践型訓練にNPOも東京大学、芝浦工業大学などと参加し、日頃から出来るだけ町会の人達と接触する機会を増やしお互いの顔を知り交流を拡大するという目的を達成できました。以下に訓練内容を紹介します。日時：2014年11月30日(日)9時～11時／参加者：総勢約100名 ①新小岩中学校 青木孝子校長先生と生徒、PTA ②3町会 連合災害対策本部鈴木一喜本部長、町会役員③葛飾区教育委員会、同都市整備部防災課、本田消防署、葛飾区医師会、葛飾保健所

午前9時、心配された前日の雨も上がり暖かい日差しの中、青木校長先生の「本日〇時〇分震度6の地震が発生したので避難所運営を開始する」の発声と共に学校の鍵を鈴木避難所運営本部長に手渡し、これを受け本部長が開会宣言し以下の訓練が開始されました。

6部門の役割分担①総務部－避難者名簿作成管理、非常用公衆電話設置②物資部－アルファ米炊き出し、ビスケット配布③救護部－本田消防署と連携 応急訓練、煙テント、AED、担架搬送④衛生部－医師会と連携 病人や怪我人救護、トリアージ⑤施設部－飲料用水濾過作業、ライフライン点検⑥警備部－ライフライン点検、簡易トイレ組み立て

NPOの活動内容

NPOア！4名、東京大学加藤孝明研究室 塩崎、色田、南、吉岡、芝浦工業大学中村仁研究室 鈴木、真船、東京大学デザイン研究室 柳沼の7氏合計11名が参加しました。会場入り口に展示用パネル（ゼロメートルの発生の仕組みと歴史、水害の危機に囲まれた町の現状などを中心に20枚）ブースを設けて訓練に参加しながら交代でパネル説明を受け持ちました。予め6部門の運営責任者に展示ブースへの誘導をお願いした事もあるため訓練終了までかなりの参加者が集まり中学生も含めて活発な質問もあり、水害の危険について考える密度の高い時間を共有できたと思います。訓練終了後配給された非常食(五目ご飯とビスケット……思ったより美味)を食べながら会場のテーブルで反省会、その後喫茶店へ場所を変えて議論が続きました。大学からの参加者には手作りの啓発活動の体験と、青木校長、鈴木本部長、医師会三尾副会長などと直接意見交

換が出来た中で、それぞれの研究テーマに何らかの成果を持ち帰ることが出来た事と思います。



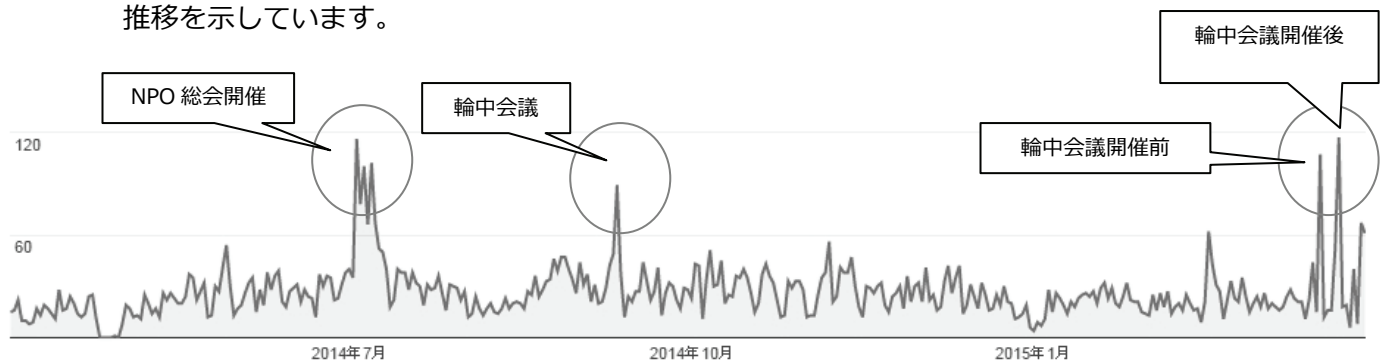
NPO ア！のホームページについて

古川 修

NPO 会員の古川修です。「NPO ア！安全快適街づくり」のホームページがリニューアルして2年が経ちました。最近の状況含めて運用状況をご報告いたします。

◎本年度の Web ページのアクセス状況について

年間通じて一定の数のアクセスがありますが、イベントや会議などが行われると一時的にページのアクセス数が増えます。下記は2014年4月～2015年3月31日のアクセス数の推移を示しています。



(効果が出ました) 輪中会議 facebook ページへの運動

2015年3月度の輪中会議は、事前に facebook ページでの事前告知&開催中&開催後に facebook ページへ専用記事をアップいたしました。会場の様子を動画で追加したことで会場の雰囲気をつかむことができたのではないかと思います。今後、ソーシャルを使って会場に来られない人にも参加できるような試みを行っていかれたらと考えております。

(ぜひご覧ください) 出前授業や講演会の記録

講演題目の15分は、第45号学生と保護者及び地元の方へ20名(中1)が出席を望み、島野副校長先生の司会で講演会が始まりました。
会場、伊井校長先生から丁寧な当NPOの18条等に基く活動紹介が形、石川理事長より大歓迎が来たとき形なたならどうするかの講演で閉じた。



10分間の休憩中、大ホールに居る日、スロープで中1生は生徒達と歓声をおぎ、来り居り、互いに声を掛け合い、1分半に見えたり、両極の仲が解ける会場、とりと、しばし熱気に包まれた。

講演題目の15分、国立福地町の保護者先生より地球環境の進化から最新の自然災害について知られたいと願う講演が始まりました。
講演は、オーロラ観測基地として、南極観測基地で何人と一緒に11年間、過酷な環境下で生活し、調査・観測・研究業務をこなしてこられた御自身の経験と、基盤で大災害が発生した際の心構えについて話された。

2015年1月17日の出前授業に参加してまいりました。子どもたちが防災について真剣に話を聞いている姿に心を打たれました。当ホームページではプライバシーに配慮して子どもたちの顔がページにうつらないような写真カットを使用しておりますが、その真剣なまなざしを写真でお伝えできないのが残念ではあります。こういった出前授業の様子もホームページに随時アップしておりますので、ぜひご覧ください。

引き続きこのホームページを、今後のNPO活動に役立てていただければと思います。

「天サイ!まなぶくん」の全国への広がりを受賞について

古川 修

NPO 会員の古川修です。「天サイ!まなぶくん葛飾版」のアプリをリリースして、2年半。ここ葛飾から発信した「防災情報を可視化するアプリ」に新たに仲間が加わりました。

「葛飾から全国へ」 同じ仕組みを使ったアプリが新たに仲間入りしました。



にいがた防災アプリ



三郷市ハザードマップアプリ

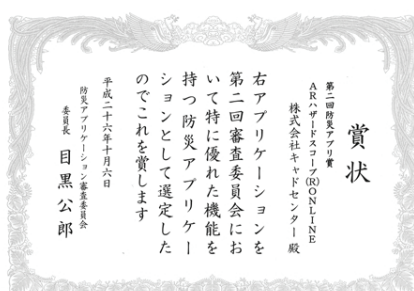


洪水時の避難所と震災時の避難所が分かれている等、進化している部分もあります。

「天サイ!まなぶくん葛飾版」が他の市区町村に負けないよう、追加掲載したい情報のリクエストなどお待ちしております。

国交省主催の防災アプリコンテストで優秀賞に当たる「防災アプリ賞」を受賞しました

2014年10月6日(月)、国土交通省主催の防災アプリコンテストにて、天サイ!まなぶくんの元となっている防災アプリ「ARハザードスコープ」が「第2回防災アプリ賞」を受賞いたしました。この賞は数ある防災アプリの中で3つだけ優秀なアプリに与えられる賞で、



防災アプリの業界標準として世の中に認められたということであらわすものです。日々の事前防災活動の中でより広めていただければと思います。

■受賞内容→①適時改善を行いアプリの速度、操作性が高い。②AR機能を使用した浸水深を示す独自性、防災・減災対策への高い有用性。

葛飾区新小岩北地区における 2006－2015 活動概観

塩崎由人

東京大学加藤孝明研究室

1. 2006－2015 年の取り組みを振り返る目的

葛飾区新小岩北地区では、2006 年から新小岩北地区連合町会、NPO ア！安全・快適街づくり、専門家、行政が一緒になって、大規模水害に備えるための取り組みを続けてきました。2006 年から現在までに、この取り組みに係わる組織や人の輪は徐々に広がり、多様な取り組みが行われるようになってきました（表 1）。ここでは、新小岩北地区における一連の取り組みを時系列に沿って並べ、どのような経緯でこの取り組みが発展してきたかを振り返ります。そして、輪中会議のように多様な組織や人が集まって、知識や経験を共有することの意義や取り組みを継続していくための条件を考えていきます。

表 1 取り組みに係わる組織や人

町会	新小岩北地区連合町会
小中学校	上平井小学校、二上小学校、松上小学校、新小岩中学校、上平井中学校
P T A	二上小学校 P T A、他
福祉施設	社会福祉法人清遊の家、うらら保育園、たつみ保育園、高齢者総合相談センター奥戸、他
民生委員	新小岩北地区 民生委員・児童委員
地域有志	俺たちの朝旅メンバー、西新小岩 3 丁目勉強会メンバー
地域企業	大成化工、他
NPO	NPO 法人 ア！安全・快適街づくり
専門家	東京大学 加藤孝明研究室、芝浦工業大学 中村仁研究室、NPO 法人 日本都市計画家協会
行政	葛飾区、東京都、国土交通省荒川下流河川事務所

2. 「知る」、「考える」、「実施する」、「研究する」、「俯瞰する」、「協働体制をつくる」

新小岩北地区における一連の取り組みは、「知る」、「考える」、「実施する」、「研究する」、「俯瞰（ふかん）する」、「協働体制をつくる」の 6 つに分類することができます。これまでの取り組みを時系列に沿って、「知る」、「考える」、「実施する」、「研究する」、「俯瞰する」、「協働体制をつくる」に整理すると、46～49 ページの表のようになります。

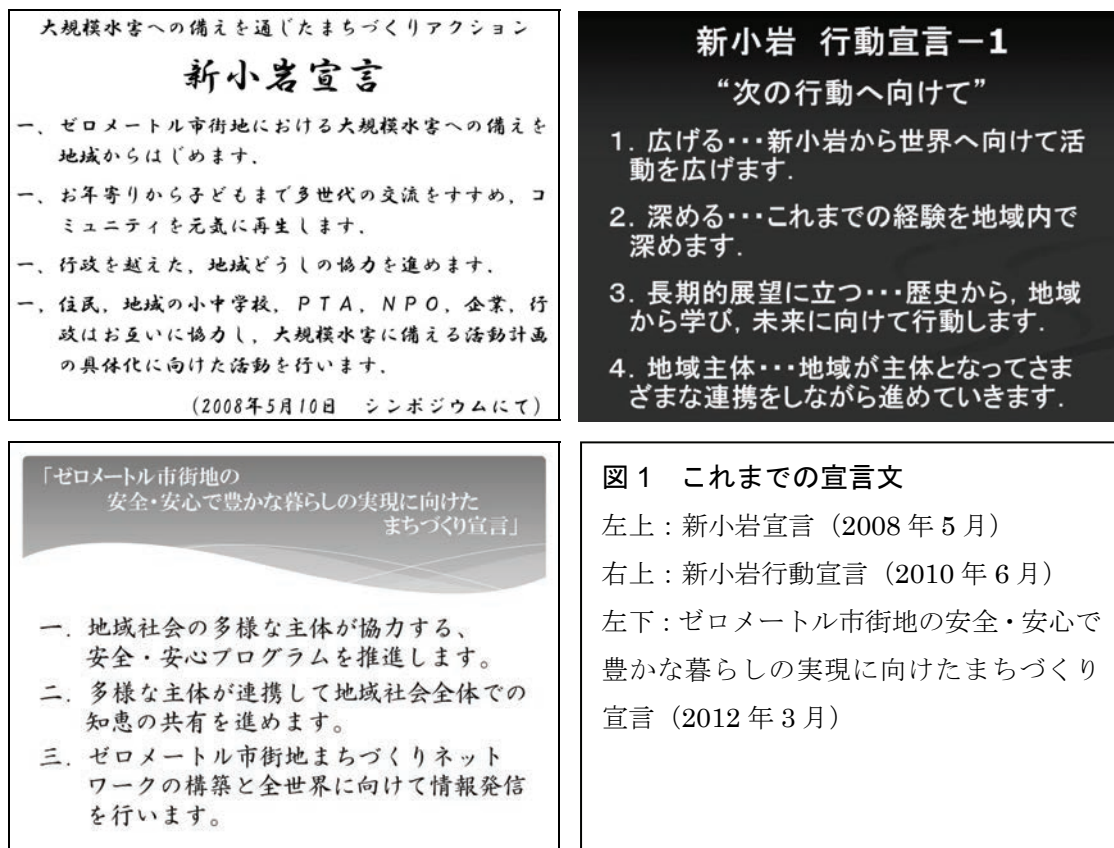
（１）「知る」、「考える」、「実施する」

「知る」は、地域の水害リスク、地域における備えの現状についての情報・経験を共有することです。「考える」は、地域の水害リスク、地域における備えの現状を知ったうえで、自分たちで行うことができる対策（自助・共助）をそれぞれが考えることです。「知る」、「考える」は、主に地域でのワークショップにおいて行われてきました。「実施する」は、考えた対策を実施することです。これまでに、多様な組織や人が様々な対策、取り組みを実施してきました。

（２）「研究する」

「研究する」は、主に研究者、専門家が、水害リスクについての情報や対策を考えるうえで必要なデータを作成することで、「知る」、「考える」、「実施する」を支援することです。研究者、大学の学生たちは、地域の人たちとともに考えながることによって学び、地域に必要なことを研究で深め、地域での取り組みに活かしてきました。例えば、水害リスク学習ツールの開発や「天サイ！まなぶくん」などが研究の中から生まれ、地域の取り組みに活用されてきました。また、浸水対応型市街地研究会などでは、将来の市街地像を議論するためのデータや考え方を整理してきました。

図１ これまでの宣言



（３）「俯瞰する」

「俯瞰する」は、その時点までの取り組みを振り返って到達点を確認し、次に取り組むべき課題を明確にすることです。定期的に、みなでその時点までの取り組みを共有するためにシンポジウムを行い、その後の取り組みの方向性を明確にするために宣言を採択してきました（図 1）。全国まちづくり会議への参加や国際交流のワークショップを行い、国内外の他地域の人たちと葛飾での活動を共有し、次の活動の展開を考えてきました。

（４）「協働体制をつくる」

「協働体制をつくる」は、取り組みに係わる組織や人が問題意識、経験、工夫、方向性を共有しながら、取り組みを進めていくための関係をつくることです。2011 年、それまでの取り組みをもとに、連合町会、NPO、専門家、区からなる「新小岩北地区ゼロメートル市街地協議会」が立ち上がりました。さらに、2012 年には、地域で活動する様々な人たちが対等な立場で参加し、皆で問題意識を共有し、これまでの経験から得た知見を分かちあい、学びあい、知恵を出し合い、より良い新小岩北地区を考えていく場として、「安全・快適まちづくり輪中会議」が立ち上がりました。

3. これまでの取り組みを振り返る ～今後の取り組みの継続に向けて～

一連の取り組みを整理した表（46～49 ページ）から、これまでの取り組みを振り返ります。そして、今後も取り組みを継続していくための条件を考えます。

（１）2006 年－2010 年：協働体制づくりと地域主体の取り組み

2006 年から 2010 年頃までは、NPO、町会、専門家、行政によって取り組みが行われてきましたが、その中で徐々に町会が主催する地域主体の取り組みが増えてきました。NPO が主催した第 1～5 回までのワークショップでは、地域の水害リスクや行政の防災体制の現状を共有したうえで、大規模水害に備えた自助・共助のあり方、被災生活のイメージ、水害に強い市街地の目標像を議論・検討しました。このワークショップを通して、知って、考えたことをもとに、2008 年頃から町会独自の取り組みが次々に行われています。さらに 2009 年頃からワークショップも町会が主催し、NPO、専門家が支援するという形式に変わりました。ワークショップに加えて、ゴムボートによる避難の可能性や洪水ハザードマップの実行性を試す取り組み（「葛西海浜公園へ移行こう」、「松戸市 21 世紀の森と広場への避難訓練」）を、NPO、町会、専門家、行政が一緒に実施して、経験を共有してきたことが、現在の取り組みの展開につながったと言えます。

（２）2010－2012 年：取り組みの方向性の共有と輪中会議の設立

「知る」→「考える」→「実施する」という取り組みのプロセスを NPO、町会、専門家、行政が協働して行い、地域の抱える課題を共有した結果、2010 年に、その後の

取り組みの方向性を検討することを目的とした「西新小岩周辺地域における安全・快適街づくり勉強会」（4回の勉強会、7回の作業部会）が開催されました。この勉強会は、町会、NPO、専門家、葛飾区、東京都、国から構成され、1年間の検討を経て、4つの方向性（①安全避難高台の確保、②浸水対応型建築物の整備、③近隣継続計画の策定、④輪中共同体会議の設立）が共有されました。現在の新小岩北地区における取り組みは、この4つの方向性に基づいて展開されています。

「西新小岩周辺地域における安全・快適街づくり勉強会」で共有された4つの方向性に対応して実施されている取り組みを見ていきます。①安全避難高台の確保については、葛飾区都市計画マスタープランにおける高台避難場所の設置の明記（2011年）、東京理科大学キャンパスの高台整備（2013年）があります。②浸水対応型建築物の整備については、葛飾区に必要な避難空間の推計、高台避難場所・浸水対応型建築物のあり方の検討を行うために、専門家、NPO、行政による浸水対応型市街地研究会（2011～2013年度）が実施されました。洪水緊急避難建物の指定などの対策も進められています。③近隣継続計画の策定、④輪中共同体会議の設立については、2012年に安全・快適まちづくり輪中会議（以下、輪中会議）が設立され、今後、輪中会議において近隣継続計画が検討されることが期待されます。

（3）2012年以降：取り組みの多様化

表（46～49ページ）をみると、輪中会議が設立された2012年頃を境に、取り組みに係わる組織、人が多様化していることが読み取れます。輪中会議は、地域における町会以外の組織（小中学校、PTA、福祉施設、民生児童委員、企業、商店など）にも取り組みを拡大し、参加者が自律的・継続的に取り組みを進めていくために、それぞれの問題意識、経験、工夫、方向感を全体で共有する場として設立されたものです。輪中会議でも、新たに取り組みに参加した小中学校、PTA、福祉施設、民生児童委員とともに、地域の水害リスクや地域での備えの現状を共有した上で、各組織ができることを議論しました。その結果、それぞれの組織は水害に備える取り組みを自律的に実施しています。

また、輪中会議で出会った人たちが協力して実施する取り組みも見られるようになりました。例えば、二上小学校PTAが毎年主催する「ふたがみこどもまつり」では、小学校のプールを利用して、地元町会の市民消防隊メンバーが操船するエンジン付ゴムボートに小学生や保護者が乗船するというイベントが行われています。ゴムボート乗船の順番待ちをしている小学生と保護者に、NPOのメンバーが水害リスク学習ツール「天サイ！まなぶくん」を使って、地域の水害リスクについて説明を行い、なぜゴムボートが必要かということを理解してもらう工夫も行われています。町会の市民消防隊にとっては、ゴムボートの操船技術を磨く場になっています。このように、輪中会議に多様な組織や人が集まり、それぞれの問題意識、経験、工夫、方向感を共有することで、実践的で楽しい取り組みが生まれる可能性があります。

4. 持続可能な取り組みを目指して

これまでの取り組みを振り返って、今後、取り組みを持続的に展開するための条件を考えると、①「知る」→「考える」→「実施する」というプロセスを全体で共有すること、②地域先行・行政後追い型であること、③「防災『も』まちづくり」であること、があげられます。

(1) 「知る」→「考える」→「実施する」というプロセス

第一に、新小岩北地区での取り組みは、当初から「知る」→「考える」→「実施する」というプロセスを踏み、実施された取り組みの結果を全体で共有したうえで、再び考えて、新たな取り組みを実施していくという循環的なプロセス（「知る」→「考える」→「実施する」→「知る」→「考える」→「実施する」→…）が構築されていました。さらに、専門家が「研究する」ことによって、行政や地域が「知る」、「考える」、「実施する」ことを支援してきました。地域において定期的にシンポジウムを開催し、その時点における取り組みの到達点を「俯瞰する」ことで、次に取り組むべき課題を共有してきたことも重要です。

(2) 地域先行・行政後追い型の取り組み体制

第二に、新小岩北地区での取り組みでは、町会による取り組みが先行的に実施されたことが契機となり、「西市小岩周辺地域における安全・快適街づくり勉強会」による検討が行われ、その結果が現在の行政の施策にも反映されていると言えます。地域が行政に対して要望するのではなく、まずは地域が主導して取り組みを実施して、行政の施策が後から追いついて来るといった形は、取り組みが発展的に継続していく上で重要です。

(3) 防災『も』まちづくり

第三に、防災だけを目的にした「防災『だけ』まちづくり」の取り組みから、日常の課題を解決すること、暮らしを豊かにすること、楽しむことなども目的とした「防災『も』まちづくり」の取り組みを行うことは持続性を確保する上で重要です。地域の有志によって行われている「俺たちの朝旅」では、舟遊びのためにゴムボートに乗ることで、参加者が操船技術を自然に身につけることができるという取り組みです。先に紹介した「ふたがみこどもまつり」もお祭りの中に水害リスクに関する啓発と備えの工夫を組み込んだものであり、「防災『も』まちづくり」の取り組みであると言えます。災害リスクという地域の課題を共有しながら、基本的には参加者それぞれの興味や動機でまちづくりに関わっていくことができれば、取り組みに参加したいと思う人の輪はさらに広がり、誰もが自ずと取り組みを続けていきたいと思えるはずです。また、防災に限らず、地域に多様な視点や価値観を持っている人が集まれば、取り組みの多様性にも厚みが生まれます。災害に対して安全なまちというだけでなく、地域の歴史や文化を取り込み、日常の暮らしが豊かで楽しいまちをつくるのが「防災『も』まちづくり」でしょう。今後、さらなる「防災『も』まちづくり」の工夫と議論が期待されます。

知る 《情報・経験を共有する》

考える 《対策を検討する》

2006

ワークショップ

● 第1回

● 第2回

● 第3回

● 第4回

● 第5回

2007

2008

2009

● 第6回

● 第7回

2010

2011

● 第8回

● 第9回

2012

2013

2014

2015



街歩きで川の水の方が市街地よりも高いことを実感



・地理情報システム (GIS) で地域の水害リスクを共有



行政による被害の現状の理解



洪水ハザードマップの活用



大規模水害発生時の対策の検討



将来のあるべき市街地像の検討

第1~5回 ワークショップ

地域の水害リスクや行政の防災体制の現状を勉強した。それらを踏まえ、水害発生時に備えた自助・共助のあり方、被災生活のイメージ、水害に強い市街地の目標像を議論・検討してきた。



防災に関する地理情報

町会の方が GIS を活用して、町会の人たちと水害リスク情報を共有

西新小岩周辺地域における安全・快適街づくり勉強会

町会、NPO、専門家、葛飾区、東京都、国からなる勉強会を立ち上げ、広域ゼロメートル市街地における水害対策の検討を行った。

①安全避難高台の確保、②浸水対応型建築物の整備、③近隣継続計画の策定、④輪中共同体会議の設立、の4つの課題が共有された。

新小岩北地区ゼロメートル市街地協議会

安全・快適まちづくり輪中会議

● 第1回「持ち寄りの共助」

● 第2回「持ち寄りの共助」

● 第3回「わからないことをなくす」

● 第4回「iPad で地域を観察する」

● 第5回「経験の共有」

● 第6回「これからの協働のあり方を考える」

● 第7回「高台化のあり方を考える」

● 第8回「経験を共有し、深め、輪を広げる」

被災地訪問



南三陸町を視察し、被災地と経験を共有した。

協働体制をつくる

研究する

俯瞰する

専門家・大学

ワークショップ開始時



- ・ワークショップの支援
- ・水害リスクに関するデータの作成

シンポジウム
「大規模水害に地域で備える」
全国まちづくり会議 in 恵庭

全国まちづくり会議 in 川崎
パネル展示

国際交流イベント
水害に備える安全・快適まちづくり
シンポジウム
全国まちづくり会議 in 熊本

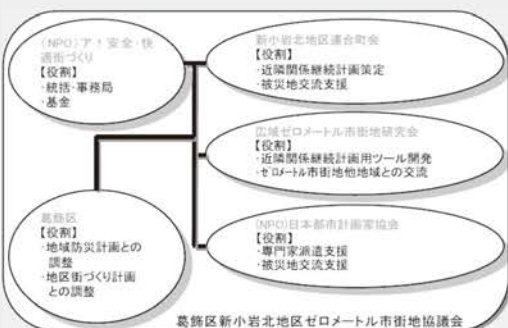
国際交流イベント
全国まちづくり防災フォーラム
全国まちづくり会議 in さいたま

シンポジウム
「街を、暮らしを、みんなでどう守るか」
全国まちづくり会議 in 神戸

シンポジウム
「大規模災害に備えて街を、暮らしを、みんなでどう守るか」
全国まちづくり会議 in 長岡

シンポジウム
「これからの協働のあり方を考える」
全国まちづくり会議 in 北上

新小岩北地区ゼロメートル市街地協議会



現在の協働体制



- ・水害リスク学習ツールの開発



浸水対応型市街地研究会

- ・広域避難の実行性の検討
- ・必要な避難空間の推計
- ・高台、浸水対応型建築物のあり方の検討

- ・防災アプリ
「天サイ！まなぶくん」の開発



実施する

NPO

町会

行政

ワークショップの主催

ボート乗船下船・親水体験イベント
「葛西海浜公園へ行こう」



船から街を見る



町会独自の取り組み



洪水ハザードマップの配布（区）



区民や事業者等への
水害出前講座の開始（区）

まるごとまちごと
ハザードマップ（国）

大規模水害対策検討委員会設置（区）

中川テラス開園（区）

松戸市・21世紀の森と広場への避難訓練
西新小岩3丁目公園での炊出し訓練



避難用ボート使用訓練



小中学校での
出前講座



都市計画マスタープランの改訂（区）
＜高台避難場所の位置づけ＞

「事業継続計画作成のすすめ」
を作成（国）



「水害時における民間集合住宅との
一時避難協定の締結に係わる
ガイドライン」作成（区）

防災アプリ「天サイ！まなぶくん」



高台整備事例：東京理科大学キャンパス
1.5m 程度の盛土を実施

洪水緊急避難建物の指定（区）

避難確保計画ひな型作成（区）

防災啓発 DVD の作成（水害編）（区）

タイムラインの検討（国）

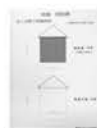


洪水緊急避難建物への備蓄物資配備（区）

水害に強い建物を促進する
街づくりルールを検討中（区）

消防団へのゴムボートの貸与（区）

赤旗・白旗 救援訓練



民間マンションとの
水害時一時協定締結
中学生と協働で防災訓練
スタンドパイプの練習会



実施する

小中学校

PTA

福祉施設
民生児童委員

地域の有志

水害も考慮した
避難所運営会議



水害を想定した
避難訓練の実施

上平井中学校理科部
の取り組み
(NPO や大学も支援)



ふたがみこどもまつり
でのボート体験



たつみ保育園
松上小への避難訓練

東京都認可保育園
BCP 作成の義務化

アレルギーガイドライン
非常食のアレルゲン除去食の購入

高齢者向けの
防災講演会

水防法改正の説明会

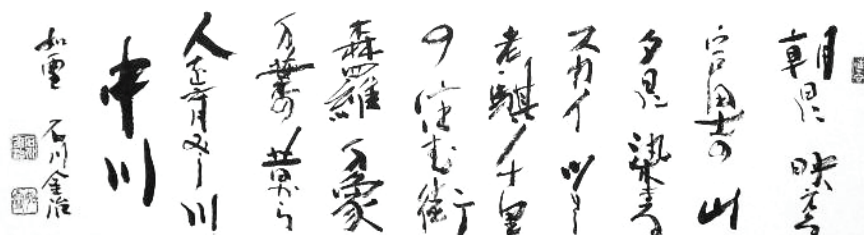
西新小岩三丁目の
有志による勉強会

俺たちの朝旅



ゴムボートの
操縦訓練

人を育みし川 中川



人を育みし川、中川
老驥千里《杜甫「贈韋左丞丈濟」から》英雄が年老
いても覇気が衰えず、遠大な志を持つところ
老驥程に伏すも志は千里にあり
《曹操「碣石篇」から》「程」は、馬小屋。駿馬は
年老いて馬屋につながられていくとも、なお千里を走ろ
うという気持ちは失われない、の意》英雄は、年老い
てもなお高い志を持ち続けていくところ。老驥千里を
思う。

この“老キ千里”の文言は、私達と一緒に活動の屋台骨を支えている人の顔を想像しやすい文言を探した結果です。

石川作詞「人を育みし川、中川」の詩文全体は、北新小岩地域を流れる、中川のありがたさを、いつも感じているので、その讃辞です。また作詞のもう一つの動機は、事務局会議終了後、渡辺さんと塩崎さんと3人で、夕日の中のスカイツリーを見た時の感動が大きかったから、その感動が原動力となって、作詞をしました(書・詩作 石川金治)

老驥、老驥はと問うたら、馬小屋に寝ていても志は千里にあり、老驥、老驥もと個性あふれる表現という。表紙の写真はたくさんの手持ち写真から見つけ出した“夕日に染まるスカイツリー”です(渡邊)

..... ♪ 編集後記 ♪

NPO ア！安全・快適街づくりは、創設2002(平成14)年から2015年、今年で13年に入りました。「葛飾区新小岩北地区ゼロメートル市街地協議会」の立ち上げにより組織力がついて「輪中会議」も持続し多様な活動がありました。第8回輪中会議は、医師会、保健関係も加わって、「総合化」が一步前へ。地域の小中学校との連携、天才まなぶくんの登場で老若男女は町のリスク観察も楽しいイベントに。また赤旗白旗のような地域独自の活動も人と人を結ぶメッセージを送る。地域の若者？世代は、ゴムボート訓練「おれたちの朝旅」ついでに災害時も役立つ河川情報を集めて盛り上がる。毎月根気のよい地元勉強会は学生も参加する。理科部が地域防災研究部となって、自分たちで夏休みのプログラムを考える。小中学生と大学生のコラボレーションも楽しく、未来の大人が育つことがとてもうれしい。地元の中学生は町会からの非常時協働要請にも応えると町会長の報告。2011・3・11東日本大災害から5年目に入り、東日本人たちのご苦労はまだまだ続いているが、地元のみなさんは“自分たちの街は自分たちで再生させたい”この思いでがんばっています。安全・快適まちづくりは、地域の将来、人口動態や文化、歴史、人々の暮らしまで読み解いていかなければならない大仕事です。「防災“も”まちづくり」持続可能なまちづくりを創出するには“まずもって語らい”未来の大人たちに託すべきは何か、深慮し、「多様性」を旨とし世間を超えた連携の時期にあるようです。輪中会議はプラットホーム、あるいはベースキャンプという。これからも地域とともに、持続可能社会を希求していきたい。今号も皆様の積極的な参加で、すばらしい総集編となりました。ありがとう♪ 2015・6 編集長 渡邊喜代美

「特定非営利法人 ア！安全・快適街づくり」

〒124-8535 東京都葛飾区西新小岩三丁目5番1号

電話 / FAX 03-3696-7480

ホームページ: <http://www.banktown.org/>



取り組みを楽しく継続するためにも、今後、さらに「親水」まちづくりの取り組みが活発になっていくことが期待されます。中川や荒川の河川空間を活かすための参考事例として、中川、荒川、パリ、ストラスブール、トゥールーズ（フランス）、アムステルダム（オランダ）の川辺の写真を並べてみました。河岸にちょっとした工夫を加えたり、植物やユニークな人道橋、歴史的モニュメントがあることによって、まちと川の関係性は豊かなものになるかもしれません。 塩崎由人

写真

表表紙：スカイツリーの見える夕暮れ（地域人提供）

本ページ：1 段目 [左/右] パリ・セヌ川 2 段目 [左] セヌ川 [中] 仏・ストラスブール [右] 中川 3 段目 [左] セヌ川 [右] 仏・トゥールーズ 4 段目 [左/右] 蘭・アムステルダム [中] 荒川（古川氏提供）

裏表紙：1 段目 [左] 中川から見たスカイツリー（地域人提供） [右] 輪中会議の様子 2 段目 [左] 中川を見る小学生 [中] パパと散歩（古川氏提供） [右] 中川テラス 3 段目 中川の風景の墨絵（小川氏、正宗氏作） 4 段目 [左] セヌ川の河岸 [中] 西井堀の由来についての地図 [右] 小学生の寄書きを手に南極に立つ岡田さん（岡田氏提供） 5 段目 [左] パリのマルシェ [右] パリ・運河沿いの空間 ※括弧のない写真は塩崎提供

